



HOSEI

# 法政大学

環境報告 2008-09



グリーン・ユニバーシティをめざして

## 1. 大学概要 (2008年度)

組織名：学校法人法政大学

創立：1880年（東京法学社（講法局・代官局）設立）

学生及び教職員数：

学生数 42172名，専任教員数 719名

専任職員数 403名，附属校教員数 214名

\*注) 学生数，専任教員，職員，附属校教員数は  
2008年4月1日時点。

### 市ヶ谷キャンパス

〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1

- 学部・大学院
  - －法学部，文学部，経営学部，国際文化学部，人間環境学部，キャリアデザイン学部，デザイン工学部，GIS（グローバル教養学部），第二部（法学部，文学部，経済学部，社会学部）
  - －大学院人文科学研究科，国際文化研究科，経済学研究科，法学研究科，政治学研究科，社会学研究科，経営学研究科，政策科学研究科，環境マネジメント研究科，システムデザイン研究科，政策創造研究科，国際日本学インスティテュート，法務研究科，イノベーション・マネジメント研究科
  - －通信教育部（法学部，文学部，経済学部）
- 附属研究施設
  - －法政大学ポアソナード記念現代法研究所，法政大学沖縄文化研究所，野上記念法政大学能楽研究所，イノベーション・マネジメント研究センター，法政大学地域研究センター，法政大学情報技術(IT)研究センター，国際日本学研究所，国際日本学研究センター

### 多摩キャンパス

〒194-0298 東京都町田市相原町4342

- 学部・大学院
  - －経済学部，社会学部，現代福祉学部

－大学院経済学研究科，社会学研究科，人間社会研究科

- 附属研究施設
  - －法政大学大原社会問題研究所，法政大学日本統計研究所，法政大学体育・スポーツ研究センター，法政大学比較経済研究所

### 小金井キャンパス

〒184-8584 東京都小金井市梶野町3-7-2

- 学部・大学院
  - －工学部，情報科学部，理工学部，生命科学部
  - －大学院工学研究科，情報科学研究科
- 附属研究施設
  - －法政大学イオンビーム工学研究所，情報メディア教育研究センター，法政大学大学院エコ地域デザイン研究所，マイクロ・ナノテクノロジー研究センター

### 海外附属研究施設

#### 法政大学アメリカ研究所

800 Airport Blvd. Suite 504, Burlingame, CA 94010, San Francisco

#### 法政大学ヨーロッパ研究センター

Flat 12 Audley Park, 40 Neeld Crescent, London NW4 3RR

#### 法政大学ヨーロッパ研究センター（チューリッヒ）

Margrit-Rainer-Strasse 11c, ch-8050 Zurich, Switzerland

### 附属校

#### 法政大学中学高等学校

〒181-0002 東京都三鷹市牟礼4-3-1

#### 法政大学第二中・高等学校

〒211-0031 神奈川県川崎市中原区木月大町6-1

#### 法政大学女子高等学校

〒230-0078 神奈川県横浜市鶴見区岸谷1-13-1



2008年8月に実施した谷津干潟自然体験エコツアーにて生物の観察中。

## 2. 編集方針

本報告書は、本学教職員、学生に加えて、近隣住民の方々や卒業生をはじめとする一般に向けて、本学の環境に関する取り組みを紹介するために作成致しました。また、本報告書は、以下の法政大学環境センターホームページにも掲載しております。

### ■ 報告対象期間

2008年4月～2009年3月

### ■ 発行年月

2009年6月

(次回は2010年6月発行予定)

### ■ 問合せ先

#### 法政大学環境センター

〒102-8160

東京都千代田区富士見2-17-1

TEL. 03-3264-5681

FAX. 03-3264-5545

E-mail. cei@hosei.ac.jp

URL <http://www.hosei.ac.jp>

以下をクリックしてご覧ください。

→法政大学の教育支援(左側バー) →環境教育→環境センター

# 目次 CONTENTS

TOP MESSAGE：持続可能な社会の構築に向けた大学の社会的責任	4
グリーン・ユニバーシティ概念図	4
学校法人法政大学環境憲章	5
2008年度NEWS	6
<b>1 環境改善活動</b>	<b>8</b>
はじめに(環境保全本部担当常務理事・統括環境管理責任者より)	9
ISO14001(環境マネジメントシステム)とは	10
活動に参加して(環境保全委員会)	20
「快適厨房コンテスト」において「愛情食堂賞」を受賞	24
環境改善活動推進キャラクター「えこぴよん」の紹介	25
<b>2 環境教育・研究活動</b>	<b>26</b>
活動に参加して(市ヶ谷・多摩環境委員会)	27
建 築	29
地 域	29
自 然	30
化 学	31
社 会	31
文 化	32
学部・大学院別環境関連ゼミナール・授業科目一覧	33
新宿エコワン・グランプリコンテストにおいて「チャレンジ賞」を受賞	37
EMS審査員研修講座の紹介	38
環境社会学会・国際シンポジウム実施報告	39
生物多様性を育む多摩キャンパスの森 ～里山実態調査と里山活動の紹介～	40
<b>3 学生の環境改善活動</b>	<b>42</b>
TOKYO NEXT DESIGN PROJECT『人と森をつなぐプロダクト』	43
ドスッとくる自然は目の当たりから —CASE1から見える人間環境学部という光景—	44
カーボンモノコックエコランカーの制作について	45
<b>4 地域との連携</b>	<b>46</b>
まちあるきエコツアー 「江戸城外堀の歴史と環境への取り組みについて」	47
八王子市「斜面緑地保全」の取り組みについて	48
<b>5 卒業生・諸機関・他大学・NGOなどの活動</b>	<b>49</b>
越谷レイクタウン まちづくりと自然環境の取り組み 「森林公園」と「グリーン・ユニバーシティ」 —法政大学を訪ねた印象—	50
<b>6 資料編</b>	<b>52</b>
本学の環境への取り組みと 大学のISO14001認証取得状況(2008年度) 教育研究組織の整備状況及び 環境負荷データ(2006年～2008年度) 第三者意見(日本大学商学部教授 村井秀樹氏)	53
編集後記	55

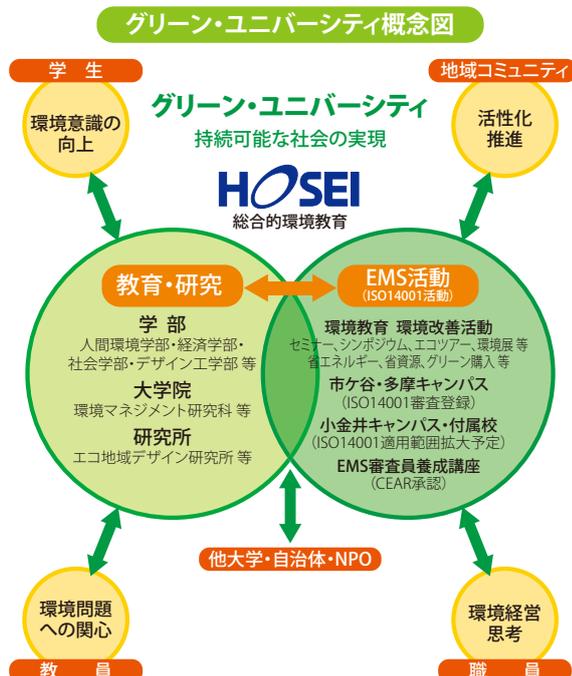
# 持続可能な社会の構築に向けた大学の社会的責任

## 法政大学EMSは新たな段階へ

持続可能な社会の構築にとって「環境」は最も重要なキーワードと言えます。本学は、総合大学としての特色を活かして、環境問題に関する教育研究活動に積極的に取り組んでいます。また、自然環境に配慮したキャンパス整備を進めています。このような社会的課題へのかかわりを通じて、将来を担う有為な学生を育てることこそ、大学の社会的責務と考えているからです。

法政大学は、1999年に環境憲章を制定し、総合大学としてはわが国初となるISO14001の認証を取得しました。爾来、十年間にわたり「グリーン・ユニバーシティ」の実現に向けて、さまざまな活動を積み重ねてきました。

環境マネジメントシステムの運用が十年の節目を迎えるにあたり、更なる発展をめざして、その運営体制を大幅に改革致しました。省エネ・省資源などの環境改善活動を職員を中心とした環境保全本部のライン・マネジメントに組み込み、教員は環境教育・研究に専念することにしました。活動の担い手をより明確化して、PDCAサイクルの効果をあげることが大きな狙いです。



## 多摩キャンパスにおける生物多様性の保全

2008年度のトピックスとして、多摩環境委員会が行った、キャンパス内「里山」の実態調査が挙げられます。多摩キャンパスは、町田市と八王子市（東京都）、相模原市（神奈川県）という3市にまたがる824,000m<sup>2</sup>の広大な校地です。そして、総面積の56%は森林として保存されております。この森林は、本学がキャンパスを開設する以前は、地元の住民の皆様によって、生活に密着した「里山」として活用されつつ維持されてきた長い歴史をもっております。1984年のキャンパス建設以来、この豊かな「里山」のほとんどに人手が入ることなく、四半世紀近く経過しようとしております。

「気候変動・温暖化」を防止し、「生物多様性」を確保するために、また、地域の景観や自然を保全するために、「里山」の整備・再生は喫緊の課題となっております。多摩環境委員会では、キャンパス内の「里山」の実態調査を実施、本格的な保全のありかたの検討を開始しました。また、学生の環境サークル「H.E.L.P!」は、しいたけ栽培、たけのこ掘り、竹とんぼや箸づくり、どんぐり拾いなど、里山の自然を活かしたさまざまな活動を展開しています。

## 環境事業による地域貢献

市ヶ谷キャンパスは、外濠を挟んで、千代田区と新宿区にまたがっています。

2006年、本学は千代田区と「千代田区環境マネジメントシステム（GES）」に関する事業協力協定を締結し交流を続けてきました。本学では、85万人の「昼間区民」をふくめた個々に環境配慮行動を促す仕組みを提言・実施するゼミを人間環境学部を設置、研究教育を行っています。

また、新宿区が推進する「みどりのカーテンモニター」や「ごみゼロデー」等の環境改善活動に積極的に参加しています。この度、区主催の「第2回 新宿エコワン・グランプリコンテスト」で、法政大学環境センターを中心として行って

## 【学校法人法政大学環境憲章】

学校法人法政大学は、「開かれた法政21」のビジョンのもとに、教育研究をはじめとするあらゆる活動を通じ、地球環境との調和・共存と人間的豊かさの達成を目指し、全学挙げてグリーン・ユニバーシティの実現に積極的に取り組む。

## 地球環境大賞

2004年4月、「第13回地球環境大賞  
優秀環境大学賞」を受賞しました。

きた市ヶ谷キャンパスにおける緑化の取り組みが、「チャレンジ賞（事業者部門）」を受賞しました。

2009年度からは、日野市との事業協力協定締結に基づく活動が始まります。日野市の長期的な都市像を描き、着実なまちづくりを進めるために具体的な提言をすることを目的に、エコ地域デザイン研究所が中心となって「水の郷・日野の地域活性化プロジェクト」を協働で実施していくものです。本学の学術研究の成果を行政施策へ反映させ、市民参画のもと、百年の大計に立った「水の郷・日野」の再生を図ることを構想しています。

この他にも、八王子市や町田市、相模原市などとの連携も進んでいます。

## 特色ある実務教育

本学では、環境マネジメントシステム（EMS）審査員を養成するため、「EMS審査員研修講座」を実施しています。研修講座は、2003年からの準備期間を経て、2005年に（財）日本適合性認定協会（JAB）の認定を受け開始しました。その後、2007年5月に（社）産業環境管理協会（CEAR）から承認を得て研修を継続しており、わが国において本学は研修講座を行う唯一の大学となっています。講座の特徴は、経済性の向上と環境改善の同時実現を目指すもので、企業や自治体の環境経営に役立つ内容となっています。この他にも、公害防止管理者（学部）や環境プランナー（大学院）などの資格取得を目指す授業を開講しています。

この「法政大学環境報告2008-09」は、本学の環境教育・研究及び環境改善活動の一端をご紹介します。ご意見・ご感想をお寄せいただければ幸いです。

2009年4月  
法政大学総長

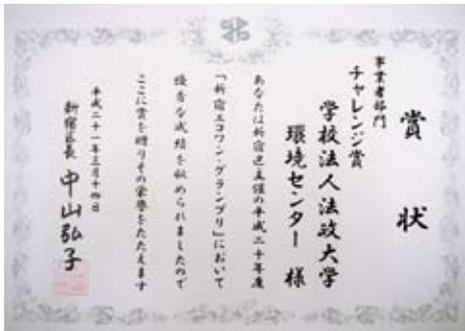
増田 昇 男



## 新宿エコワン・グランプリコンテストで「チャレンジ賞」を受賞

新宿区が主催する「第2回新宿エコワン・グランプリコンテスト」で、法政大学環境センターを中心として行ってきた市ケ谷キャンパスにおける緑化の取り組みが、「チャレンジ賞（事業者部門）」を受賞しました。

本学は、市ケ谷キャンパスの一部が新宿区に所在していることから、新宿区が推進する「みどりのカーテンモニター」や「ごみゼロデー」等の環境改善活動に積極的に参加してきました。また、市ケ谷キャンパスでは、本学が掲げる「グリーン・ユニバーシティ」の実現に向けて、2004年度からさまざまな緑化に挑戦しています。詳細については、37ページの特集記事をご覧ください。



## 「快適厨房コンテスト」において小金井キャンパス東館食堂が「愛情食堂賞」を受賞

電化厨房フォーラム21が主催する「快適厨房コンテスト2008」において、小金井キャンパス東館食堂が人と環境にやさしい優れたプランとして「愛情食堂賞」を受賞しました。

小金井キャンパスの東館食堂がハード、ソフトの両方の取り組みについて、食べる楽しさを上手に演出している点が高い評価を受け、今回の受賞となりました。

ハード面では、ビュッフェコーナーにおけるIHコンロの活用のように電化厨房の良さを生かし、温かくおいしい料理を提供している点が好評でした。また、ソフト面では、地方特産メニューの企画や、利用者からメニューや味についてヒアリングを実施するなど、学生の食への関心を引きだす努力をしている点が評価されました。学生、教職員の皆さんも「愛情食堂」を是非体験してみてください。詳細については、24ページの特集記事をご覧ください。

## 法政大学環境改善活動推進キャラクター「えこぴょん」誕生!

環境保全委員会・グリーン購入小委員会は、本学において推進している環境改善活動を身近に感じていただくために、法政大学環境改善活動推進キャラクターを公募しました。多数の応募がありましたが、厳正な審査の結果、人間環境学部4年日高香奈さんが考案した「えこぴょん」に決定しました。今後、「えこぴょん」は、キャンパスの様々な場所に登場する予定です。詳細については、25ページの特集記事をご覧ください。



## サステナビリティ教育研究小委員会がスタート

「サステナビリティ教育とは何か」を調査研究し、市ケ谷キャンパスでの導入の可能性を検討するために、市ケ谷環境委員会に「サステナビリティ教育研究小委員会」が発足しました。

2009年3月には、東京大学名誉教授の宇沢弘文氏を講師にお招きし、「リベラルアーツを考える 一社会的共通資本としての教育一」をテーマに講演会を実施しました。

## 「第9回環境展」においてグリーン電力を活用

2008年10月20日(月)から10月24日(金)にかけて、市ケ谷キャンパスの外濠校舎1階メディアラウンジなどを会場に「第9回環境展」が開催されました。

今回の環境展においては、学内の会場で使用する電力のすべてにグリーン電力（東京都・小水力）を使用しました。



## 多摩キャンパスで森林実態調査がスタート

多摩キャンパスでは2008年8月から12月にかけて「多摩キャンパス森林実態調査」を実施しました。

多摩キャンパスは約824,000m<sup>2</sup>の広大な校地面積を有し、その内の約461,510m<sup>2</sup>（校地面積の約56%）が保存緑地となっています。一般的に樹木は二酸化炭素の吸収源とされていますが、その種類や状態によっては、かえって二酸化炭素の排出源になってしまうという指摘もあります。今回の調査は多摩キャンパスの広大な緑地の現状を把握し、今後の多摩キャンパスの環境保全活動、環境教育・啓発活動に役立てていくことを目的としています。

調査および報告書の作成は、森林環境の調査・保全の分野で実績のある有限会社サトウ草木に委託しました。

7月29日に行われた第1回打ち合わせには、池田寛二多摩環境委員会委員長（社会学部教授）の声掛けにより、本学教職員、学生にとどまらず八王子市役所職員や独立行

政法人森林総合研究所研究員の方等、幅広い方々にお集まりいただき、調査の進め方や方法について検討しました。計画立案段階も含め約5ヶ月にわたって行われた今年度の調査は2008年12月に終了しましたが、広大なキャンパスの調査は今回だけでは十分なものとはいえません。2009年度以降も調査を継続していく方向で計画を検討中です。



## 環境社会学会と共催で環境問題の国際シンポジウムを開催

2008年10月4日(土)・5日(日)に、第1回東アジア環境社会学国際シンポジウムが、多摩キャンパス百周年記念館国際会議場で、法政大学環境センターと環境社会学会の共催で開催されました。

中国、韓国、台湾からの15人のゲストをはじめ約200人の参加者があり、各国の環境問題、環境運動、環境政策についての26本の報告と討論が2日間にわたって行われました。本学の船橋晴俊社会学部教授および田中充同学部教授も報告を行いました。また、6日(月)には、川崎市の臨海部エコタウンへのフィールドトリップも実施しました。

東アジア地域各国の中心的な環境社会学研究者が集中的な報告と討論を行ったことは、初めてのことであり、アジアにおける環境社会学の発展に画期的な意義をもった催しとなりました。今後の学術的交流を推進するために、日本の環境社会学の代表的著作約50冊を、中国、韓国、台湾の各研究グループに贈呈しました。



## 学生による里山保全活動

多摩キャンパスでは、キャンパス内の里山保全活動の一環として、伐採した樹木を利用した学生によるキノコ栽培が行われています。この企画を発案し活動の中心になっているのは、多摩の環境系総合サークルH.E.L.P!です。H.E.L.P!は里山保全活動の他にも学園祭でのゴミ減量化・分別徹底への取り組みや「エコプロダクツ2008」への出展等、日頃から様々な環境問題に取り組み、多摩キャンパスを拠点に活発に活動しています。

2008年度はH.E.L.P!の他に多摩キャンパスの環境活動に係るキャンパス内外の連携を目的として学生が立ち上げた組織「たまeco」のメンバーも参加して、3月26日にシイタケとナメコの菌打ち作業を行いました。多摩キャンパスの植栽管理担当者の指導の下に、大学で用意したシイタケとナメコの菌をドリルで穴をあけた丸太に金槌で打ち込んでいきました。順調にいけば1~2年後にはおいしいキノコが育っているはずですよ。





新宿区が地球温暖化対策の一環として推進する  
「新宿みどりのカーテン」プロジェクトに参加

# 1

## 環境改善活動

## はじめに

## 法政大学EMSの実質化に向けて

環境保全本部担当常務理事・地球環境委員会委員長  
加藤 豊

21世紀はまさに「環境の世紀」です。地球では、さまざまな環境問題が発生し、その解決策が模索され、企業や政府、自治体、そして地域における活動が活発化しています。大学もまた、社会の一員として環境改善を推進することは、今や当然の責務であります。

本学は、いち早く大学キャンパスにおける環境改善活動を開始し、1999年の市ヶ谷キャンパスでの「ISO14001」認証登録に引き続き、2004年には多摩キャンパスでも認証登録をして、全学的な「グリーン・ユニバーシティ」の実現をめざして邁進しています。

とりわけ2008年度は、法政大学EMS（環境・マネジメント・システム）の実質化に向けて、その運営体制を大幅に改革致しました。今回の改革は、環境改善活動を事業室と施設部を中心とした環境保全本部のライン・マネジメントに組み込み、教員は環境に関する教育・研究に専念することによって、活動の担い手をより明確化し、PDCAサイクルを実質化することが大きな狙いです。今回の改革による主な変更点は以下のとおりです。

## &lt;2008年度EMS運営体制の主な変更点&gt;

- ①統括環境管理責任者の設置
- ②地球環境委員会の委員長を総長から担当理事へ変更
- ③エコ委員を廃止してエコ・マネージャーを新設
- ④専門部会の活動をライン業務にビルト・イン
- ⑤教員は各地区の環境委員会の活動へ、職員は環境保全委員会の活動へ参加（活動の担い手の明確化）

また2008年度は、本学の環境への取り組みが高く評価され、二つの賞を受賞しました。まず一つは、法政大学環境センターが中心に推進してきた市ヶ谷キャンパスにおける緑化の取り組みが「第2回新宿エコワン・グランプリコンテスト」のチャレンジ賞（事業者部門）に、そしてもう一つは、小金井キャンパスにおける東館食堂が環境にやさしい優れたプランとして「快適厨房コンテスト2008」の愛情食堂賞に輝きました。このように環境への取り組みにあたっては、ソフトとハードの両面からの実質的なアプローチが必要不可欠であります。

本学では今後とも、学生・教職員が一体となって「グリーン・ユニバーシティ」の実現に向けた活動を推進し、地球の環境問題の解決に向けて貢献して参りたいと考えております。本学の環境問題への取り組みに対し、皆様のご理解とご協力をお願い致します。

## 持続可能な社会を目指して

統括環境管理責任者・環境保全委員会委員長  
環境保全統括本部長

板橋 晃作

これから目指すエコ社会（持続可能な社会）については皆さんもご存じのことと思いますが、①低炭素社会、②循環型社会、③自然共生社会の3つが揃うことで「持続可能な社会」が生まれます。①は自然を壊し、たくさんのエネルギーを使って物を作っては捨てる社会を脱却する、つまり温室効果ガスをなるべく出さない社会にすること、②はゴミを減らし限りある資源を繰り返し利用してゆく社会、つまりReduce（リデュース）、Reuse（リユース）、Recycle（リサイクル）であり、③は人間と地球に暮らす生き物が共に暮らし、自然の恵みが得られる社会のことです。法政大学では持続可能な社会を目指して環境への全学的取組を1999年の環境憲章の制定から始まり、以後10年にわたりさまざまな活動をハード、ソフト両面より積み重ねてまいりました。

ソフト面ではISO14001認証の取得、EMS審査員養成講座の立ち上げ、エコ地域デザイン研究所における環境研究、環境マネジメントシステム（EMS）実施、であり、ハード面ではESCO事業を取り入れた市ヶ谷キャンパス外濠校舎や小金井キャンパス東館の建設及び牟礼の法政大学中高等学校建設と多摩キャンパスにおける空調設備更新などです。このように法政大学では全国でも有数の環境先進大学であり、グリーン・ユニバーシティ目指して取り組みを進めています。皆さんもそれぞれの活動を一緒に進めてまいりましょう。



打ち水大作戦にも参加しました

## 法政大学はISO14001認証を取得しています

今日われわれの社会は、地球温暖化・オゾン層の破壊・酸性雨・熱帯雨林の減少・野生生物種の減少など、全地球的な課題に直面しています。また、世界的に温暖化をめぐる論議が盛んになる中で、教育研究機関としての大学も「持続可能な社会」を構築するために重要な役割を担うべきであると考えます。

本学はいち早く大学キャンパスにおける環境改善をめざす活動を開始、1999年大学院棟においてISO14001の認証を取得しました、その後2001年には市ヶ谷キャンパス全体に、2004年には多摩キャンパスへ認証範囲（サイト）を拡大してきました。この認証は3年ごとの更新となっており、2008年6月に3回目の更新審査を受け、認証継続が認められました。

登録証と付属書



## 登録概要

1 登録者名及び代表所在地	学校法人法政大学 市ヶ谷キャンパス・多摩キャンパス 東京都千代田区富士見二丁目17番1号
2 審査登録日	1999年9月29日
3 更新日	2008年9月29日
4 改定日	2008年7月15日
5 有効期限	2011年9月28日
6 審査機関	財団法人 日本規格協会審査登録事業部 (JSA)
7 環境マネジメントシステム 規格番号	JISQ14001 : 2004 (ISO14001 : 2004)
8 登録範囲	<p>教育研究および事業活動（エクステンション・カレッジ講座、公開講座・セミナー、国家試験受験講座等）における</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>(1) セミナー・シンポジウム等による環境教育及び啓発活動</li> <li>(2) 自然環境との共生</li> <li>(3) エコツアー</li> <li>(4) 学外との連携</li> <li>(5) 環境関連情報の共有化</li> <li>(6) グリーン購入</li> <li>(7) 省エネルギー</li> <li>(8) 省資源</li> <li>(9) ゼロエミッション</li> </ul> <p>を推進するための環境マネジメントシステム</p>

## ISO14001（環境マネジメントシステム）とは

ISO（アイ・エス・オー）とは、International Organization for Standardization（国際標準化機構）の略称です。ギリシャ語の平等・標準を司る神ISOS（アイソス）からもじって、頭文字IOSをISOと呼称しています。ISOは純然たる民間機関で、本部はスイスにあり、国際連合および関連の国連機関、国連専門機関での諮問機関の地位を有しています。会員資格は各国の代表的な標準化機関の一機関に限定されており、日本からはJISの調査・審議を担当する日本工業標準調査会が参加しています。

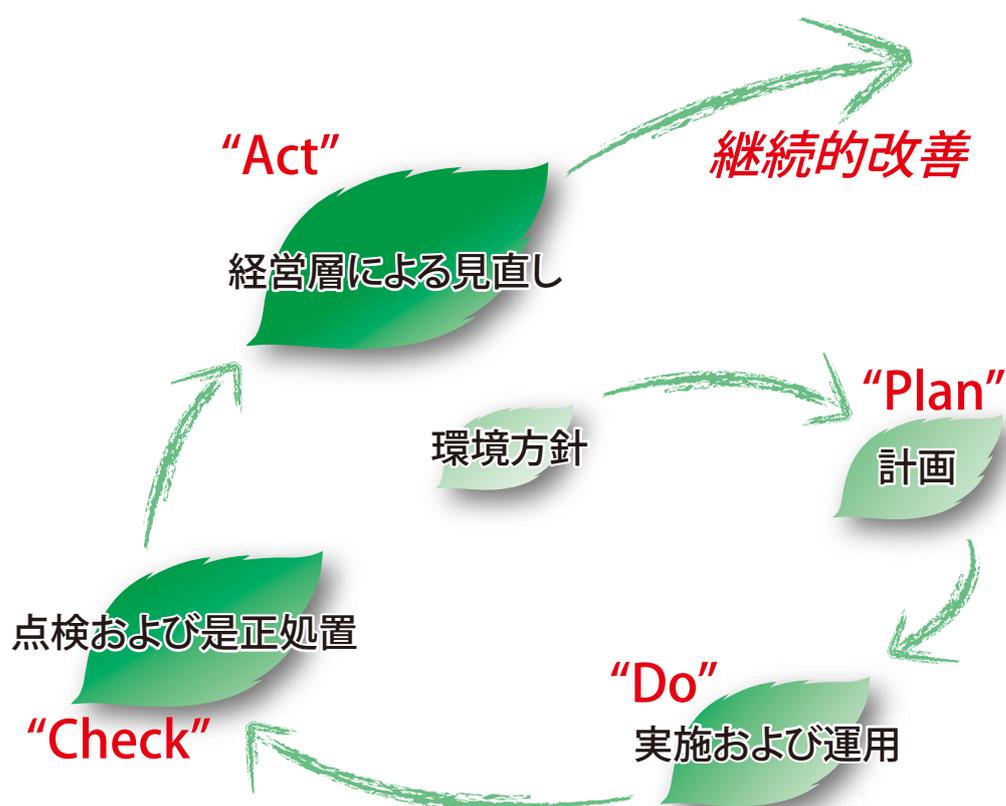
ISOは知的・技術的・経済的活動分野での国際間の協力を推進するために作られた世界標準で、ISO14001は「環境マネジメントシステム（EMS=Environmental Management System）」の国際規格として1996年に発効し、2004年に改正されました。日本では企業や自治体での審査登録が進んでおり、ご存じの方も多いでしょう。国内の大学でもこのシステム導入の動きが活発になっております。

このシステムは、自らの組織の活動が環境へ与える負荷を低減することを目指して、「環境方針」を策定し、自主的な

計画立案と点検改善を継続してゆくところに特徴があります。すなわち、下図のように「環境方針」実現のため、計画（Plan）し、それを実施（Do）し、結果を点検・是正（Check）して、不都合があればこれを見直し（Act）、再度計画を立てるというシステム（PDCAサイクル）であり、これを継続的に運用することで環境改善の実をあげてをめざしています。

ISO14001はこのEMSを構築する手順について規定しています。各組織が自らの活動を詳細に点検することで改善すべき事項を特定し、その実現プロセスにおいては内部監査を自主的に行い、また第三者機関の審査を受けることにより、厳しく自らを律していくことが求められます。そのため、あらゆる手順と行動実績に関する文書化を図り、責任の所在を明確化し、だれが担当者でも同じようにシステムが運用される仕組みとなっています。

以下に、ISO14001規格の概要と本学の取り組みを紹介します。



## 環境方針

### Plan

環境方針は、組織が自らの行動原則を定めた声明文です。本学では、「学校法人法政大学環境憲章」及びISO14001規格（2004）に則って「環境方針」を定め、地球環境問題に積極的に取り組む姿勢を、最高経営責任者である総長名で制定することとしました。現在の「法政大学環境方針」は右のとおりです。

なおISO14001規格（4.2環境方針）では、

「トップマネジメントは、組織の環境方針を定め、環境マネジメントシステムの定められた適用範囲の中で、環境方針が次の事項を満たすことを確実にすること。

- 組織の活動、製品及びサービスの、性質、規模及び環境影響に対して適切である。
- 継続的改善及び汚染の予防に関するコミットメントを含む。
- 組織の環境側面に関係して適用可能な法的要求事項及び組織が同意するその他の要求事項を順守するコミットメントを含む。
- 環境目的及び目標の設定及びレビューのための枠組みを与える。
- 文書化され、実行され、維持される。
- 組織で働く又は組織のために働くすべての人に周知される。
- 一般の人々が入手可能である。」

と定められています。



## 法政大学環境方針

—グリーン・ユニバーシティをめざして—

法政大学は、持続可能な発展には地球環境問題への取組みが重要であると認識し、法政大学環境憲章の下、全学を挙げ、グリーン・ユニバーシティを目指し、以下の取組みを推進する。

- 1 教育研究活動や公開シンポジウムなどを通じ、大学内外の健全な環境の維持・向上に努めるとともに、環境改善のための啓発活動を積極的に展開する。
- 2 キャンパス内での活動として、省資源・省エネルギー、グリーン購入、廃棄物の抑制と再資源化の促進、緑化などに積極的に取り組む。また、地域社会の環境保全活動に参画する。
- 3 キャンパス内での活動にともなう環境負荷を低減するとともに、地球環境問題に関する議論や啓発などの活動を推進するため、目的・目標を策定する。各キャンパスで活動する教職員は一致してその達成に努める。
- 4 活動に関わる環境関連の法規制などを順守するとともに、環境汚染の予防と自然環境の保全・再生に努める。
- 5 キャンパスの教職員、学生、関連会社の社員に対し、環境教育を通じて環境意識の高揚を図る。
- 6 定期的に環境監査を実施し環境マネジメントシステムを見直すと同時に、その継続的改善に努める。
- 7 環境憲章や環境方針を始めとする環境関連情報を、文書や大学ホームページ (<http://www.hosei.ac.jp/>) などを通じて、学内の教職員・学生や一般社会へ積極的に公開し、大学の内外でのコミュニケーションを推進する。

2008年4月1日

法政大学総長

## 環境コミュニケーション

内部の構成員あるいは準構成員や外部の利害関係者と相互に情報交換を行っています。

ISO14001規格（4.4.3コミュニケーション）では、環境コミュニケーションを積極的に行うことが求められています。2008年度の実施状況（市ヶ谷・多摩）を以下に掲げます。

（市ヶ谷）

### 外部コミュニケーションの記録

区分	件数	主な内訳
行政機関	48件	環境省（チーム・マイナス6%等）、文部科学省、経済産業省、東京都環境局、千代田区、新宿区、八王子市、京都市 等
大学・大学院	13件	大妻女子大学、國學院大学、千葉大学、東京理科大学、日本女子大学、八戸工業大学、三重大学、龍谷大学、北京大学 等
小・中・高校	4件	群馬県立前橋工業高等学校、宮城県黒川高等学校 等
学生	9件	桜美林大学、上智大学、洗足学園音楽大学、明治大学、立教大学 等
その他企業等	116件	グリーン購入ネットワーク、省エネルギーセンター、地球環境戦略研究機関、日本規格協会、第一法規、東京電力、日本ファシリティ・ソリューション、環境新聞社、東洋経済新報社、日本テレビ、毎日新聞社、TBS 等
合計	190件	

（多摩）

区分	件数	主な内訳
行政機関	8件	関東経済産業局、経済産業省資源エネルギー庁、東京都環境局、八王子市教育委員会、八王子市、林野庁森林整備部研究・保全課
大学・大学院	2件	東京理科大学、多摩美術大学
その他企業等	21件	学術・文化・産業ネットワーク多摩、A SEED JAPAN、東京電力、デコ、省エネルギーセンター、京王電鉄、エコプロダクツ運営事務局 等
合計	31件	

## 環境側面

## Plan

環境側面は、環境に対して影響を及ぼす原因となる要素を意味します。十分な調査に基づきこれを分析することは問題点の発見につながり、問題解決にむけての第一歩となります。本学では、キャンパス内での活動やサービスのなかで環境に対して悪い影響を及ぼす要素を「有害な（マイナスの）環境側面」、良い影響を与える要素を「有益な（プラスの）環境側面」というように分類しています。有害な（マイナスの）環境側面の具体例としては、エネルギーの使用、紙資源の消費、廃棄物の排出、有害物質の取り扱いなどがあります。有益な（プラスの）環境側面の例としては、環境教育・研究、講演会や講座などによる普及啓発、地域社会との連携、環境情報の発信などの事項があげられます。

ISO14001規格（4.3.1環境側面）では、

「組織は、次の事項にかかわる手順を確立し、実施し、維持すること。

a) 環境マネジメントシステムの定められた適用範囲の中

で、活動、製品及びサービスについて組織が管理できる環境側面及び組織が影響を及ぼすことができる環境側面を特定する。その際には、計画された若しくは新規の開発、又は新規の若しくは変更された活動、製品及びサービスも考慮に入れる。

b) 環境に著しい影響を与える又は与える可能性のある側面（すなわち著しい環境側面）を決定する。

組織は、この情報を文書化し、常に最新のものにしておくこと。

組織は、その環境マネジメントシステムを確立し、実施し、維持するうえで、著しい環境側面を確実に考慮に入れること。」

と定められています。下に法政大学における主要な環境側面の一例を示します。これらは環境への影響が生じる可能性と結果の重大性などの観点から客観的に評価付けを行っています。法政大学環境センターのホームページでも参考データを公開していますのでご参考ください。

分類	環境側面	環境影響	主管部局・関連組織
有害な環境影響	電力の使用	地球温暖化・エネルギーの消費	施設部 エネルギー・温暖化対策小委員会 等
	上質紙の使用	森林資源の消費	事業室 資源・リサイクル小委員会 グリーン購入小委員会 等
	使用済み上質紙の排出	廃棄物の排出	事業室 資源・リサイクル小委員会 等
	空き缶の排出	廃棄物の排出	事業室 資源・リサイクル小委員会 等
	都市ガスの使用（ボアソナード・タワー）	地球温暖化・エネルギーの消費	施設部 エネルギー・温暖化対策小委員会 等
	消耗品の使用	資源の消費 廃棄物の排出	事業室 グリーン購入小委員会 資源・リサイクル小委員会 等
	ボイラーの使用	地球温暖化・エネルギーの消費	施設部 エネルギー・温暖化対策小委員会 等
	空きペットボトルの排出	廃棄物の排出	事業室 資源・リサイクル小委員会 等
	その他の可燃物・不燃物の排出	廃棄物の排出	事業室 資源・リサイクル小委員会 等
有益な環境影響	教職員、学生等に対する環境教育の普及・啓発	オゾン層の破壊	(市ヶ谷・多摩) 環境管理責任者 (市ヶ谷・多摩) 環境委員会 環境センター 等
	環境影響を軽減するための研究	水質汚濁	
	環境関連情報の共有およびWEBサイトの構築	土壌汚染	
	社会及び産官学との連携	地球温暖化	
	公開セミナー・シンポジウムの計画・開催	エネルギーの消費	
	国際セミナー・シンポジウムの計画・開催	資源の消費 廃棄物の排出 騒音・振動・悪臭	

## 環境目的・目標及び実施計画

### Plan

EMSは、環境改善活動をいわゆる目標管理の原則に従って実行するしくみといえます。

第一段階として、環境方針を具現化するため中期的な「環境目的」を定め、今後3年間かけて何にどう取り組むかを設定します。第二段階として、それを実現するため「環境目標」という1年間の行動計画を設定します。つまり単年度および3年間の目標（目的）の両面から管理してゆくことで実効性を高めてゆく手法をとっています。

環境目的・目標を達成するために実施計画を策定しなければなりません。これは、組織の部門別・階層別に設定されていることや、手段や日程が決められていることが求められています。

ISO14001規格（4.3.3目的、目標及び実施計画）では、以下のように定められています。

「組織は、組織内の関連する部門及び階層で、文書化された環境目的及び目標を設定し、実施し、維持すること。

目的及び目標は、実施できる場合には測定可能であること。

と。そして、汚染の予防、適用可能な法的要求事項及び組織が同意するその他の要求事項の順守並びに継続的改善に関するコミットメントを含めて、環境方針に整合していること。

その目的及び目標を設定しレビューするにあたって、組織は法的要求事項及び組織が同意するその他の要求事項並びに著しい環境側面を考慮にいれること。また、技術上の選択肢、財務上、運用上及び事業上の要求事項、並びに利害関係者の見解も考慮すること。

組織は、その目的及び目標を達成するための実施計画を策定し、実施し、維持すること。実施計画は次の事項を含むこと。

- a) 組織の関連する部門及び階層における、目的及び目標を達成するための責任の明示
- b) 目的及び目標達成のための手段及び日程

法政大学では、実施計画の総称を「グリーン・キャンパス創造計画」と名づけております。参考までにその内容を以下に掲げます。

### グリーン・キャンパス創造計画書（環境教育・研究・環境保全）

#### 1. 環境改善のための啓発活動の推進に関する事項（環境方針1・4）（責任者：市ケ谷・多摩地区環境管理責任者）

	08年度環境目標	環境マネジメントプログラム	実施部局
市ケ谷	教職員・市民を対象として地球環境問題に関する公開セミナー・シンポジウムを企画・実施する。	●講演会・シンポジウムの開催（2回以上）	市ケ谷環境委員会が統括 学部事務課、大学院事務部、環境センター が取り組む
	地球環境問題に関連した展示・その他の活動を企画・実施する。	●学内での環境展を開催（1回）	市ケ谷環境委員会が統括 環境保全委員会が協力
		●屋上緑化スペースを利用した環境教育の実施	市ケ谷環境委員会、屋上緑化維持管理プロジェクトが取り組む
		●市ケ谷キャンパス内の緑化スペースを利用した学生支援活動の実施	環境センターが取り組む 市ケ谷環境委員会が協力
	教職員・学生向けの体験型プログラムを企画・実施する。	●エコツアーの開催（5回以上）	市ケ谷環境委員会
環境管理・監査に関する教育の普及	●EMS内部監査員養成講座に関する情報を学生および一般市民への周知	環境センター、人事部が取り組む 市ケ谷環境委員会が協力	
学内における環境に関する研究の現状について調査する。	●学内の刊行物による調査を行う。	市ケ谷環境委員会が統括 学務部・環境センター協力	

	08年度環境目標	環境マネジメントプログラム	実施部局
多摩	教職員・市民を対象として環境問題に関する公開セミナー・シンポジウム等を開催する。	●環境問題をテーマとした公開授業を開催	多摩環境委員会が取り組む
	環境問題に関連した展示・その他の活動を企画・実施する。	●学内での環境展・環境問題に関わる合同セミを開催	多摩環境委員会が取り組む
	教職員・学生向けの体験型プログラムを開催する。	●エコツアー等を開催 ●多摩キャンパスに虫を復活させる活動の実施	多摩環境委員会が取り組む

#### 2. 地域社会の環境保全活動への参画の推進に関する事項（環境方針2）（責任者：市ケ谷・多摩地区環境管理責任者）

	08年度環境目標	環境マネジメントプログラム	実施部局
市ケ谷	学内を中心とした交流プログラムを開催する。	●学内の他キャンパス・付属校との交流会を企画・実施する（1回以上）	市ケ谷環境委員会
		●他大学・諸機関との環境交流会を企画・実施（3回以上）	市ケ谷環境委員会
	学外の諸機関との交流プログラムを開催する。	●学生と連携した地域貢献活動の企画・実施	環境センター 市ケ谷環境委員会が協力

	08年度環境目標	環境マネジメントプログラム	実施部局
多摩	学内外の諸機関との交流プログラムに積極的に参加する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>他キャンパス・付属校との交流会や他大学・諸機関との環境交流会に参加</li> <li>学生の環境自主活動への協力</li> </ul>	多摩環境委員会が取り組む
	学外の諸機関との交流プログラムを実施する	<ul style="list-style-type: none"> <li>他大学との合同ゼミ等への協力・経費補助</li> </ul>	多摩環境委員会が取り組む

3. 環境関連情報発信の推進に関する事項（環境方針7） （責任者：法政大学環境センター）

	08年度環境目標	環境マネジメントプログラム	実施部局
市ケ谷	環境報告書、学内刊行物の発行	<ul style="list-style-type: none"> <li>「法政大学環境報告2007-08」の発行</li> <li>「法政大学環境報告2008-09」の編集</li> </ul>	(市ケ谷・多摩地区) 環境管理責任者、環境センターが取り組む
		<ul style="list-style-type: none"> <li>「コンパス 臨時号」の発行</li> </ul>	環境センター、学生センターが取り組む

4. 省資源の推進に関する事項（環境方針2） （責任者：事業室長）

	08年度環境目標	環境マネジメントプログラム	実施部局
市ケ谷・多摩共通	目標値は推定使用量の4%減とする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>コピー、リソ、OA用紙の使用量管理を行なう。</li> <li>使用量抑制のための啓発活動を行なう、特に教員への啓発を行なう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>事業室が統括</li> <li>市ケ谷・多摩キャンパスの事務組織が取り組む。</li> </ul>
	市ケ谷・多摩キャンパスの大学発行物の非紙媒体化を促進し、実践例を公開・周知する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>電子メール、管理情報システム、授業支援システムなどの積極的活用を推進する。</li> <li>非紙媒体化の啓発活動を行なう。</li> </ul>	同上



5. 省エネルギーに関する事項（環境方針2） （責任者：施設部長）

	08年度環境目標	環境マネジメントプログラム	実施部局
市ケ谷・多摩共通	市ケ谷・多摩キャンパスのエネルギー使用量（電気・ガス・重油（市ケ谷）・灯油（多摩））について、基準使用量の2.0%削減	<p><b>（市ケ谷・多摩キャンパス共通）</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>照明装置の使用管理（屋内外とも）</li> <li>冷暖房装置の運転管理</li> <li>その他の電気器具の使用管理（コピー機、PC、湯沸かし器など）</li> <li>エレベーターの利用管理（上がり1階、下り2階は階段利用を心がける）</li> <li>ESCO事業の運営</li> <li>「チームマイナス6%」活動の推進</li> </ul> <p><b>（市ケ谷キャンパス）</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>屋上緑化事業</li> <li>ロゴライトアップ時間（20～22時）の維持</li> </ul> <p><b>（多摩キャンパス）</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>警備員が巡回する19時に未使用教室を消灯する</li> <li>イルミネーション点灯時間（12月1日～1月末）の維持</li> <li>休職中など学生が登校しない期間は自販機の稼働台数を減らすことを関係業者に要請する</li> </ul>	施設部が統括し、市ケ谷・多摩キャンパスの事務組織が取り組む

6. グリーン購入の推進に関する事項（環境方針2） （責任者：事業室長）

	08年度環境目標	環境マネジメントプログラム	実施部局
市ケ谷・多摩共通	学内外印刷について、用紙の使用状況を調査する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>学内外印刷での再生紙利用、グリーン購入等を啓発するポスター等を作成し、周知徹底する。</li> </ul>	市ケ谷・多摩キャンパスの事務組織が取り組む
	07年度に引き続き、「グリーン購入ガイドブック」を環境省冊子「環境物品等の調達に関する基本方針」に準じて更新する。購入状況を調査し、公表する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>環境省冊子「環境物品等の調達の推進に関する基本方針」を参考資料として掲示板上に掲載する。</li> <li>グリーン商品（消耗品）に関する調査（カタログ更新）</li> <li>グリーン購入ガイドブックの更新と同ガイドラインの周知</li> <li>利用に関する学内調査</li> </ul>	市ケ谷・多摩キャンパスの事務組織が取り組む
	消耗品について、参考値として購入状況の集計は行う。（古紙偽装問題に伴いデータ供給業者のグリーン商品対象基準が不統一となっている状況が続いているため、目標管理は当面停止する）		

7. 廃棄物の抑制と再資源化の推進に関する事項（環境方針2） （責任者：事業室長）

	08年度環境目標	環境マネジメントプログラム	実施部局
市ケ谷・多摩共通	市ケ谷・多摩キャンパスから排出される一般廃棄物排出量（学生一人あたりの排出量）について、基準値（2006年度）をベースに推定学生数を考慮し2008年度で2%（2年累積4%）を削減する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>分別の徹底（学生・教職員・業者等）</li> <li>有価物の再資源化の促進</li> <li>リユース情報の公開</li> <li>機密性の高い文書の処理の取りまとめ</li> </ul>	事業室が統括市ケ谷・多摩キャンパスの事務組織が取り組む。



## 推進体制

### Plan

本学のEMSを運営するための体制は以下のとおりです。

- (1)最高経営層（総長）を補佐する経営層（担当理事）を置いています。
- (2)総長は環境管理責任者を任命し、EMSの確立・実施・維持のための役割・権限・責任を付与します。
- (3)担当理事は地球環境委員会を召集し、環境方針や運営組織など全学的な問題を審議します。
- (4)市ケ谷及び多摩キャンパスではEMS運営のために、それぞれ「環境委員会」と全学の「環境保全委員会」を設けています。必要に応じて、各委員会のもとに小委員会を設置しています。
- (5)（市ケ谷・多摩）「環境委員会」は、委員長は各地区の環境管理責任者、副委員長は委員のなかから互選することとなっています。この他には、各学部の専任教員より選出されたEMS委員、環境保全委員会委員長及び副委員長、総長の任命する教職員によって構成されています。（市ケ谷・多摩）「環境委員会」では、環境教育研究を推進するとともに、学内外を対象に環境意識を高める企画に関わっています。
- (6)「環境保全委員会」は、委員長は統括環境管理責任者、副委員長は施設部長または事業室長となっています。この他には、市ケ谷・多摩環境委員会委員長、関連部局の管理職によって構成されています。大学の事業活動に伴う環境負

荷の低減と環境意識の啓発推進に取り組み、テーマ別の活動を推進しています。

- (7)EMS全般の事務局は法政大学環境センターが統括しています。

ISO14001規格（4.4.1資源、役割、責任及び権限）では以下のとおり規定しています。

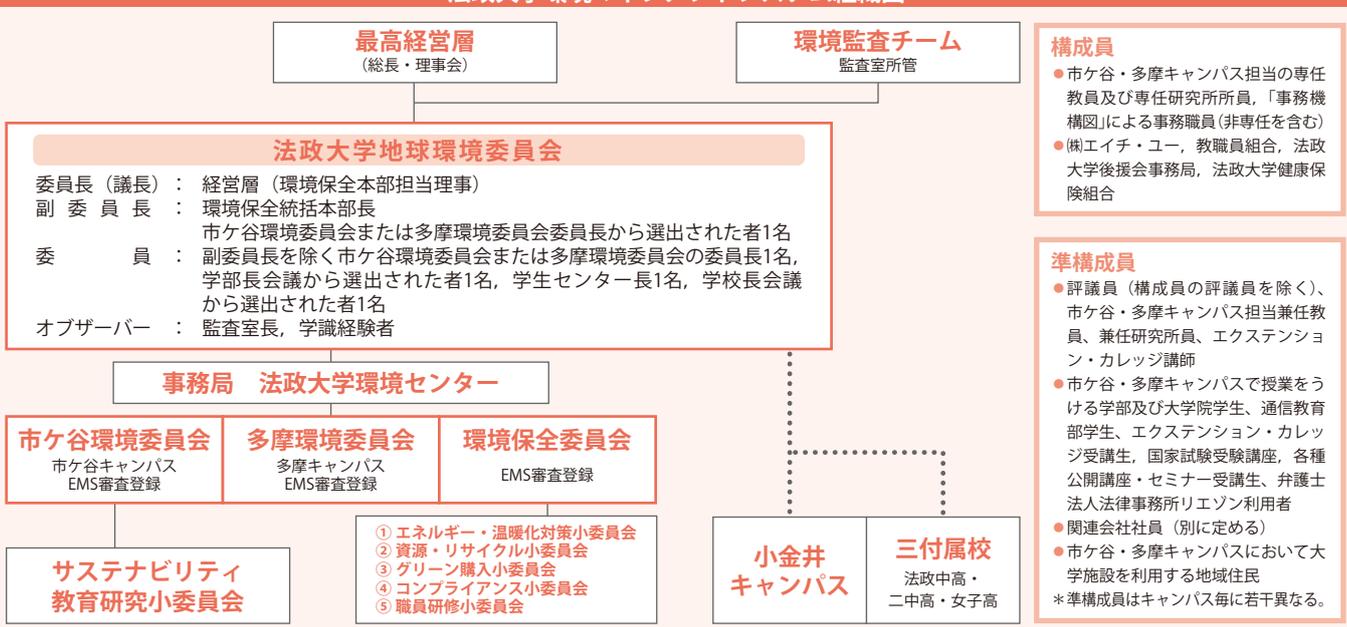
「経営層は、環境マネジメントシステムを確立し、実施し、維持し、改善するために不可欠な資源を確実に利用できるようにすること。資源には、人的資源及び専門的な技能、組織のインフラストラクチャー、技術、並びに資金を含む。

効果的な環境マネジメントを実施するために、役割、責任及び権限を定め、文書化し、かつ、周知すること。

組織のトップマネジメントは、特定の管理責任者（複数も可）を任命すること。その管理責任者は、次の事項に関する定められた役割、責任及び権限を、他の責任にかかわりなくもつこと。

- a) この規格の要求事項に従って、環境マネジメントシステムが確立され、実施され、維持されることを確実にする。
- b) 改善のための提案を含め、レビューのために、トップマネジメントに対し環境マネジメントシステムのパフォーマンスを報告する。」

法政大学環境マネジメントシステム組織図



## 力量, 教育訓練及び自覚

## Do

環境マネジメントシステムの実施にあたっては、全構成員が関する知識を一定レベル維持していることが求められます。研修の対象者は構成員全員であり、それぞれが環境マネジメントシステムにおける役割・権限・責任等に関する一定の認識を持ってもらうため、様々な研修を提供します。同様に、学生や関連会社など準構成員の人たちにも理解を深めてもらうため情報発信を行っています。

ISO14001 (4.4.2 力量, 教育訓練及び自覚) では、

組織は、組織によって特定された著しい環境影響の原因となる可能性をもつ作業を組織で実施する又は組織のために実施するすべての人が、適切な教育、訓練又は経験に基づく力量をもつことを確実にすること。また、これに伴う記録を保持すること。

組織は、その環境側面及び環境マネジメントシステムに伴う教育訓練のニーズを明確にすること。組織は、そのようなニーズを満たすために、教育訓練を提供するか、又はその他の処置をとること。また、これに伴う記録を保持すること。

組織は、組織で働く又は組織のために働く人々に次の事項を自覚させるための手順を確立し、実施し、維持すること。

- a) 環境方針及び手順並びに環境マネジメントシステムの要求事項に適合することの重要性
- b) 自分の仕事に伴う著しい環境側面及び関係する顕在又は潜在の環境影響、並びに各人の作業改善による環境上の利点
- c) 環境マネジメントシステムの要求事項との適合を達成するための役割及び責任
- d) 規定された手順から逸脱した際に予想される結果

と定められており、法政大学では毎年以下の研修を実施しています。

- \* EMS審査員研修講座
- \* ISO管理職研修
- \* 部門別研修
- \* 新入職員フォローアップ研修
- \* 自衛消防訓練
- \* 各教授会での研修

## 内部監査

## Check

ISO14001規格 (4.5.5 内部監査) では以下の通り規定しています。

組織は、次の事項を行うために、あらかじめ定められた間隔で環境マネジメントシステムの内部監査を確実に実施すること。

- a) 組織の環境マネジメントシステムについて次の事項を決定する。
  - 1) この規格の要求事項を含めて、組織の環境マネジメントのために計画された取決め事項に適合しているかどうか。
  - 2) 適切に実施されており、維持されているかどうか。
- b) 監査の結果に関する情報を経営層に提供する。

監査プログラムは、当該運用の環境上の重要性及び前回までの監査の結果を考慮に入れて、組織によって計画され、策定され、実施され、維持されること。

次の事項に対処する監査手順を確立し、実施し、維持すること。

- 監査の計画及び実施、結果の報告、並びにこれに伴う記録の保持に関する責任及び要求事項
  - 監査基準、適用範囲、頻度及び方法の決定
- 監査員の選定及び監査の実施においては、監査プロセスの客観性及び公平性を確保すること。

以下に内部監査の概要を掲げます。

## 1. 概要

毎年、市ヶ谷キャンパス、多摩キャンパスにおいて「(内部)環境監査」を実施しています。2008年度は、多摩キャンパスが10月下旬、市ヶ谷キャンパスが3月上旬に実施しました。環境監査は、各キャンパスにおけるすべての教育・事務組織(部門)が対象となっており、3年毎のEMS更新審査までに全部門が一度は受けることになっています。

監査を行う人(環境監査員)は、本学の教職員のうち研修機関が実施する環境監査員養成研修(2日間または5日間コース)を修了している人たち数名を選任し、総長が委嘱します。これに加えて本学には大学院環境マネジメント研究科・政策科学研究科や人間環境学部をはじめ環境分野について研究する大学院・学部があり、学生にも監査に参加する機会が提供されていることが特徴です。また、オブザーバーと

して学生に環境監査の実際を見学してもらい、環境監査制度の理解を深めてもらう試みも同時に行っています。

監査の主管部局は監査室であり、監査の結果に関する情報は最高経営層である総長に報告されます。「不適合」事項（改善を要する事柄）があれば、直ちに是正処置をとらなければなりません。さらに毎年実施される第三者審査機関によるEMS審査においても、その結果を報告することになっています。

## 2. 2008年度内部監査実施状況

### （監査室長 田中宗七）

環境監査は、2008年度に3回実施しました。市ヶ谷キャンパスに於いては6月上旬にシステム変更及び適用範囲拡大に係る監査、3月上旬に定期環境監査を実施し、多摩キャンパスに於いては10月末に定期環境監査を実施しました。

今年の監査の特徴としては、システム変更及び適用範囲拡大に係る監査が挙げられます。この監査は、旧62年館が市ヶ谷田町校舎に改修されたことに伴い実施されました。適用範囲拡大に係る監査については、適用範囲拡大の意義やEMSの内容について構成員によってほぼ理解されており、監査上特に問題になることはありませんでした。一方、システム変更に係る監査では、EMS運営体制変更後間もないためか、変更内容が必ずしも周知されているとは言い難く、その浸透定着に向けて努力していく必要があることを痛感しました。

また、変更されたシステムそのものに目を向けると、市ヶ谷・多摩共通の課題として、EMSを実行する直接の部署に業務が集中し、EMS委員やエコマネージャー、環境保全委員会小委員会の活動の役割・位置付けが一部明確に共有されていない点が明らかになりました。今後は、上記の課題を克服すべく、システムの修正も視野に入れつつ、一層コミュニケーションを密にしながら取り組んでいかねばならないと考えています。

また、2008年度の監査で喜ばしく感じたことは、定期環境監査を補助してくれたメンバー（計14名）、即ち学生・大学院生、若手専任職員達の環境監査員としての力量が極めて優れていたことが挙げられます。勿論、環境監査員の資格要件として、環境監査員養成研修（2日間または5日間コース）等の専門研修を受講した者と限られてはいますが、本学の「環境マネジメントシステム関連文書ファイル」の内容の

理解に積極的に取り組んだ成果が表れていました。また、問題や課題を指摘するに留まらず、他の部門に紹介したい優れた取り組みを「奨励」事項として発掘してくれたのも例年以上に多い点が特徴的でした。

このように、これからの環境監査は若い人たちが専門知識を研鑽し、学内の優れた取り組みを広く紹介することによって、環境に対する取り組みが身近かつ厚みをもったものとなり、より有効なEMS活動の促進に寄与するようになるのではないかと、そのような事を考えさせられた今年の内部監査でした。

## コンプライアンス

### Check

大学の事業活動は様々な法律や条例により規制されています。当然のことながらEMSではこれらの法規制等をきちんと把握し順守していること（コンプライアンス）を確実にしておくことが求められています。また法規制等の登録情報を維持しておくことも必要です。

ISO14001規格（4.3.2 法的及びその他の要求事項）では、

*組織は、次の事項にかかわる手順を確立し、実施し、維持すること。*

- a) *組織の環境側面に関係して適用可能な法的要求事項及び組織が同意するその他の要求事項を特定し、参照する。*
- b) *これらの要求事項を組織の環境側面にどのように適用するかを決定する。*

*組織は、その環境マネジメントシステムを確立し、実施し、維持するうえで、これらの適用可能な法的要求事項及び組織が同意するその他の要求事項を確実に考慮に入れること。*

4.5.2（順守評価）では、

*4.5.2.1 順守に対するコミットメントと整合して、組織は、適用可能な法的要求事項の順守を定期的に評価するための手順を確立し、実施し、維持すること。*

*組織は、定期的な評価の結果の記録を残すこと。*

*4.5.2.2 組織は、自らが同意するその他の要求事項の順守*

を評価すること。組織は、この評価を4.5.2.1にある法的要求事項の順守評価に組み込んでよいし、別の手順を確立してもよい。

組織は、定期的な評価の結果の記録を残すこと。

と定められています。大学では、定期的に法規制等に関する情報を更新し、その法令等を順守しているかの確認（順守評価）を毎年行い、コンプライアンスを担保しています。

## マネジメントレビュー

### Act

1年間のEMS活動全般を通じての反省点や問題点を確認し、改善にむけてシステムの「マネジメントレビュー」を行っています。経営層である担当理事がグリーン・キャンパス創造計画の実施状況、環境パフォーマンス評価結果、環境監査の結果などを参考にして環境方針の修正の必要性を含めて検討しています。

見直し自体は経営層が行うものですが、この評価を適切に実施できるように、経営層に対して必要な情報が確実にインプットされなければなりません。そのためには、日ごろから問題点や課題を整理しておくことが重要です。

ISO14001規格（4.6 マネジメントレビュー）では、以下のように規定しています。

トップマネジメントは、組織の環境マネジメントシステムが、引き続き適切で、妥当で、かつ、有効であることを確実にするために、あらかじめ定められた間隔で環境マネジメントシステムをレビューすること。

レビューは、環境方針、並びに環境目的及び目標を含む環境マネジメントシステムの改善の機会及び変更の必要性の評価を含むこと。マネジメントレビューの記録は、保持されること。

マネジメントレビューへのインプットは、次の事項を含むこと。

- a) 内部監査の結果、法的要求事項及び組織が同意するその他の要求事項の順守評価の結果
- b) 苦情を含む外部の利害関係者からのコミュニケーション
- c) 組織の環境パフォーマンス

d) 目的及び目標が達成されている程度

e) 是正処置及び予防処置の状況

f) 前回までのマネジメントレビューの結果に対するフォローアップ

g) 環境側面に関係した法的及びその他の要求事項の進展を含む、変化している周囲の状況

h) 改善のための提案

マネジメントレビューからのアウトプットには、継続的改善へのコミットメントと首尾一貫させて、環境方針、目的、目標及びその他の環境マネジメントシステムの要素へ加え得る変更に関係する、あらゆる決定及び処置を含むこと。

2009年度に向けたマネジメントレビューでは、以下のようなレビューを行いました。

- (1)環境マネジメントシステム（EMS）は有効に機能している。環境方針の変更の必要はない。
- (2)高等教育機関として、持続可能な発展のための教育・研究を推進する戦略を検討する。
- (3)新EMS運営体制が真に効率的で効果的な推進体制になるように点検し必要な修正を検討すること。
- (4)引き続き、千代田区との連携をはじめ環境教育・研究を推進するためのパートナーシップを強化する。
- (5)引き続き、多摩キャンパスの自然環境を生かした活動に積極的に取り組むこと。
- (6)ESCO事業の推進や「チームマイナス6%」運動により、地球温暖化対策を積極的に推進する。
- (7)市ヶ谷・多摩キャンパスにおいて連携を図り、推奨される取り組みが小金井キャンパスや付属校にも水平展開されるよう推進する。
- (8)屋上緑化に代表される緑化の取り組みや蛍の育成、里山保全などキャンパスにおける生物多様性の保全に向けた取り組みを継続的に推進する。
- (9)学生や生徒による環境問題への取り組みに対して積極的に支援する。

## 活動に参加して（環境保全委員会）

### 資源・リサイクル小委員会

#### 資源・リサイクル小委員会報告

環境保全委員会資源・リサイクル小委員会座長・学務部学部事務課課長補佐  
**碓井 正博**

3R活動で地球資源  
を大切に！



2008年度より、市ヶ谷、多摩地区の職員組織の活動の拠点として、環境保全委員会の小委員会である資源・リサイクルに関する活動を開始しました。しかし、年度当初から諸問題があり、小委員会としての実質的な活動は秋からとなりました。2009年度に向けての取り組みも含めて報告をさせていただきます。

当小委員会は、一般廃棄物の排出量の削減、コピー、リングラフ、OA用紙の消費量の削減を目指す環境目標を掲げています。地道な活動ですが、分別廃棄がまだ徹底されていないため、廃棄物の分別を呼びかけるニュース発信やポスターの作成などを実施しました。

さて、2007年度には新入生数が予想以上に増加したため、ごみの排出量の増加はどうしてもやむを得ないことです。ただ、「しかたがない」、「やってもムダ」という感覚で

は、めざすべきグリーン・ユニバーシティに到達することはなかなかできないでしょう。大切だと思うことは、一人ひとりの意識が大きな成果を生み出すわけで、3R活動（リデュース、リユース、リサイクル）を積極的に取り組むことによりごみをできる限り減少させて、地球資源を有効に使う循環型社会を確立する大学を目指していければと思います。

現時点では、廃棄物の排出量削減のアイデアとして、使用後の蛍光灯は直接業者に回収してもらうことを検討しています。リサイクル設備があればガラス、水銀、金属に分別が可能となり、100%のリサイクルが可能となります。些細なことではありますが、廃棄物の削減にも繋がる行動と考えています。この他にもいろいろなアイデアがあるかと思いますが、皆様のご意見を環境センターやお近くのエコ・マネージャーにお寄せいただきたいと思います。

#### コラム 職場に広げよう！ エコの輪



保健体育部保健課主任・  
エコ・マネージャー  
**安達 圭子**

皆さんは宛名シールの使用済みの枠を更にシールとして活用する方法を知っていますか？

これで封筒を閉じてもよし、クリアファイルにインデックスとして貼ってもよし、べたっと付きすぎず、はがしやすいためとても便利です。封筒をシールする場合も、至急とか重要と書き込んで目立たせたり。綺麗な絵や写真のカレンダーも、デスクマットに入れたりラッピングに使用するとか。エコは「家事検定」のカテゴリーにも加えられるほど旬な事。古切手もちゃんと郵便局に持っていきます（笑）

#### コラム 多摩図書館における 廃棄図書のリユースについて

図書館事務部多摩事務課主任 エコ・マネージャー  
**木村 康子**

多摩図書館では、古い本の廃棄が常に発生します。押印、ラベル等の装備がある本は古書店では歓迎されません。従来はただ廃棄をしていましたが、八王子市の「浅川園」という厚生施設から引き取りたいという申し出がありました。この施設は内臓の機能等に障害のある方の生活指導および職業訓練を行うところです。本の選別・取りまとめが施設利用者の就労の場になるということで、月1回新聞・図書を引き取ってくれることになりました。



法政大学 環境保全委員会・事業室  
小委員会で作成したポスター

## エネルギー・温暖化対策小委員会

## 省エネルギー活動について

環境保全委員会エネルギー・温暖化対策小委員会座長・施設部環境施設課長  
杉山 孝

本小委員会は、省エネルギーを積極的に推進することを目指し、2008年度も精力的に普及・啓発活動を行いました。

また、ISO14001を導入して、市ケ谷キャンパスでは10年目、多摩キャンパスでは5年目を迎える年度でもあり、環境マネジメントシステム組織体制の大幅な見直しもあり、これまで以上に積極的な活動を展開いたしました。

本小委員会では、2008年度のエネルギー使用量削減目標値を、市ケ谷・多摩両キャンパスとも基準使用量の2.0%削減と決めました。様々な取り組み、構成員のご理解・ご協力により、市ケ谷・多摩両キャンパスともに2008年度のエネルギー使用量は目標値を達成しました。さらに本年度は、省エネニュースを使い、毎月の削減状況を構成員に周知し現状把握してもらい、削減活動の志気を高めました。

## [具体的な活動について]

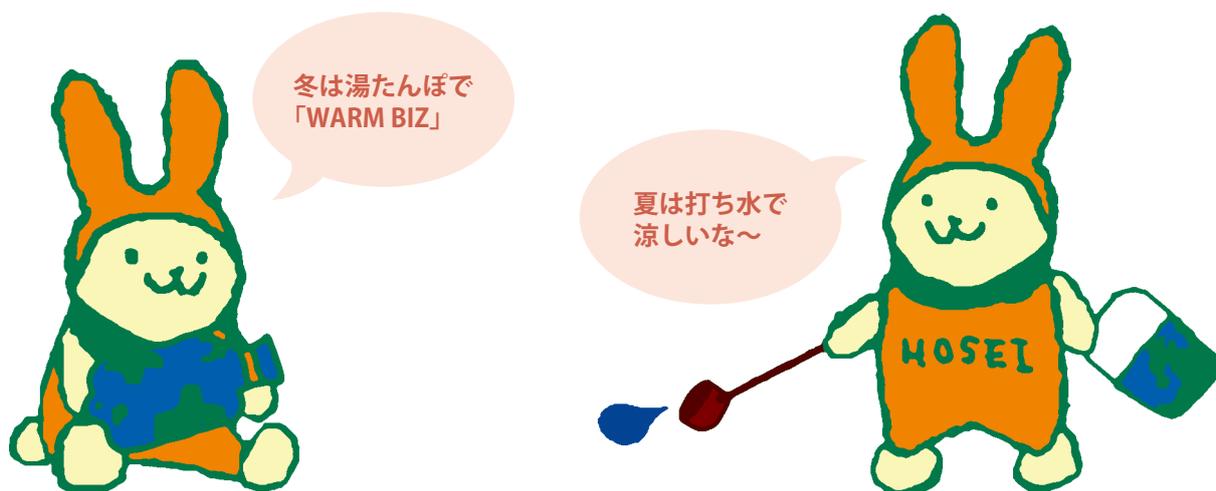
本年度も引き続き、省エネ強化月間を設け6月から9月に「COOL BIZ」、11月から3月に「WARM BIZ」として、冷暖房装置の適切な温度設定を省エネポスター、省エネニュースを通じて、構成員に理解・協力を要請いたしました。

併せて、設備管理面での取り組みとして、未使用教室空調・照明のオフ、冷房運転時間の短縮、外濠校舎のエスカレーター運転時間の短縮、休暇期間中のエレベーターの間引き運転、待機電力のカット、夜間イルミネーションの時間短縮、加湿器を導入した冬季の快適な室温管理、節電型自販機

の導入の推進等、様々な活動を実施してきました。7月には、市ケ谷・多摩・小金井の3キャンパスで「打ち水大作戦」を実施し、ヒートアイランド現象軽減と電力エネルギーの節約を学生に訴えていきました。10月の環境展では、ESCO事業の紹介パネル、建設会社2社の環境にやさしい建物についての紹介パネル等を展示しました。

また、本学では、現在8つのESCO事業を導入し、省エネルギーに関する包括的なサービスの提供を受けており、大学の利益と地球環境の保全に貢献する一挙両得の体制を整えています。8事業全体でのCO<sub>2</sub>排出量削減量は、1679t-CO<sub>2</sub>/年となっており、CO<sub>2</sub>排出量削減率は11.3%にもなっております。これは、東京ドーム約20個分の面積に植林することにより吸収されるCO<sub>2</sub>量に相当しています。

近年、教室および研究室等でのIT関連機器や空調機器の普及により学内でのエネルギー使用量は増加する状況です。本小委員会では、構成員が環境問題に直接かかわる機会が増え、省エネルギーの意識が高まればよいと思います。エレベーターの利用を控える、昼休みはPCの電源をオフにする等、当たり前といえる日常生活の積み重ね、地道な努力が省エネルギーに反映されてゆくとということが大切なことだと思うからです。今後も引き続き、構成員一人一人のご理解・ご協力をお願いするとともに、更なる省エネルギー推進に取り組んでいきたいと考えています。



## グリーン購入小委員会

### グリーン購入小委員会の活動

環境保全委員会グリーン購入小委員会座長・事業室次長  
勝又 秀雄

#### [2008年度の主な活動実績]

##### 1. グリーン商品購入実績

古紙偽装問題発生に伴い、データ供給業者（アスクール等）のグリーン商品対象基準が不統一となっている状況が続いており、2008年度は目標管理を停止しました。

##### 2. 環境展に参加

環境展への出展は、環境ラベル紹介に関するパネル展示（4枚）、古紙偽装問題パネル展示（2枚）、エコバッグ作成・配布を行いました。

##### 3. エコバッグ作成

エコバッグを作成し環境展に参加された学生や各種環境活動の企画に参加された教職員など約80人に配布しました。バッグの形やデザインは好評を博しましたがエコ素材

に難点があり、1カ月程度の耐久性能であったため、2009年度は、より耐久性の高いエコ素材で長期にわたって使用できる物にしたいと考えています。

##### 4. 環境改善活動推進キャラクター決定

「グリーン・ユニバーシティ 法政」を広く学内外にアピールすることを目的として、グリーン購入小委員会が主体となって環境改善活動推進キャラクターを募集しました。学生、職員から16点の応募があり、厳正な審査の結果、大賞1点、優秀賞1点が選定されました。受賞者は、大賞は、人間環境学部生、優秀賞は工学部生がそれぞれ受賞しました。採用されたキャラクターは、グッズやポスターなど様々な用途として使用され、「環境問題に積極的に取り組んでいる法政大学」を強くアピールしていきます。

##### 5. 2008年度版 グリーン購入ガイドブック作成

事業室で、法的事項をチェックして公表しました。



小委員会の企画で作成したエコバッグ

### コラム 環境パフォーマンス 縦2m37×横3m



学務学部事務課主任  
堀江 一乃

「環境って何なのだろう…」と考えるきっかけづくりになればと思い、第9回環境展に書作品「環境藝術」を出展しました。

象形文字（3,500年前に使用された中国古代の文字＝現在の漢字の祖先）をモチーフにして、すべてが大自然であった太古の世界をマンダラ絵物語り風のユートピアとして描こうとし、「和」という文字を中心に「風」「光」「月」「星」「虹」「動物」「人間」等を配しました。本来あるべき姿を視覚から脳へダイレクトに伝え、DNAを揺さぶり、感性へ繋がったら…。環境とは、と働きかけるのは誰でもできそうですが、さて何をすればよいのなかなかわかりません。一人ひとりが自分から行動し小さな気づきを発信することが大切なことなのかもしれません（作品写真掲載P.26）。

### コラム ペットボトルキャップ収集で 国際協力

保健体育部多摩体育課長  
エコ・マネージャー  
佐藤 健

小さなPRでも学生たちは行動してくれる、そんな思いを持っています。体育施設の主な利用は体育授業受講生と、体育会選手約500人です。2008年夏から、近隣小学校が取り組むペットボトルの使用済みキャップ回収に協力しています。呼びかけは事務室のドアに貼って、空箱ひとつを用意しただけ。たかが紙1枚ですが、これが皆さん見ているのです。次々と学生や先生方来室し、半年あまりで約20キロ1万個相当を回収しました。



## コンプライアンス小委員会

### 2008年度コンプライアンス小委員会の活動

環境保全委員会コンプライアンス小委員会座長・  
総務部オレンジネット校友課長

小川 浩幸

コンプライアンス小委員会の2008年度の取組みとしては、①事業室が修正した「環境影響評価表（B-有害）」の確認、②事業室が修正した「環境関連法規制等登録簿」の確認、③総務部・多摩事務部が緊急時への対応についての教育・訓練を実施しているかの確認、④事業室が順守評価を適切に行っているかの確認、を行いました。

「環境影響評価表（B-有害）」「環境関連法規制等登録簿」の確認については、専門知識を要する作業であり、現実的には作成した委託業者（小委員会メンバー）から説明を受ける程度に止まってしまい、確認するレベルまでには至りませんでした。この作業は、専門知識の無い者が行うことには実効性の点から疑問が残ります。小委員会のメンバー構成や確認方法等の検討が、今後の課題です。

緊急時への対応についての教育・訓練の実施および順守評価の実施の確認については、実施部局から報告を受け、小委員会で確認を行いました。教育・訓練および順守評価については、実施部局から選出された委員が報告し、それを同じ実施部局選出の委員が確認する状態になっています。確認作業を効果的にするのであれば、実施部局以外の者が確認しなければ意味がありません。今後、さらに改善が必要であると考えます。

### コラム 継続は力なり



大学評価室課長補佐  
山田 佳男

社会的責任の観点から教育の質の向上と保証をめざす動きが今になって一段と強まり、まさに継続的改善が期待できるPDCAサイクルの普及が急速に広がりつつあります。PDCAは難しいと言われるですが、例えば、緑化が進み落ち着いた雰囲気のあるキャンパス、環境に配慮した低炭素型校舎、環境交流プログラム等々。そんな空間や機会を創造し継続して楽しめる仕組みを身近なところから考えていきたいですね。新鮮で豊かなアイデアが湧き出でくれば、いろいろな意味で改善が期待できるでしょう。

## 職員研修小委員会

### 職員研修の実施について

環境保全委員会職員研修小委員会座長・人事部人事課長

波田野 静男

本学におけるEMS体制は今年度10年の節目を迎え、EMSの実質化を目的に組織改革が実施されました。旧環境研修部会は新しく設けられた環境保全委員会職員研修小委員会にその役割を引き継ぐこととなりました。

2008年度は、ISO管理職研修会、新入職員対象のEMS教育・理解を目的とするフォローアップ研修、内部環境審査員等養成研修講座への参加促進に取り組みました。特にISO管理職研修では、人間環境学部堀内行蔵教授、大学評価室山田佳男課長補佐を講師に迎え、今年度実施のEMS体制改定内容を中心に研修を実施し、新体制の周知・理解に努めました。

積年の課題であるEMSを実質化する方策として、PDCAサイクルを職員組織（以下事務組織という）にビルトインし、実業務を通じてEMSを推進することが有効であると言われていました。

PDCAサイクルそのものは一般的なマネジメント手法であり、EMSに固有のものではありません。2009年度は、新たに全学で「自己点検・評価」活動が実施されます。事務組織では従来から年度単位で部・課目標を設定しており、PDCAサイクルは決して遠い存在ではありません。こういった学内諸活動と連携し、有効な研修プログラムを実施していくことが、それぞれの活動の実を上げると共にEMSの実質化を図る途ではないでしょうか。当小委員会ではこれを次年度の課題として取り組みたいと考えています。

### コラム 「環境展」「一斉清掃」参加で意識向上!!



研究開発センター  
エコスタッフ  
柴田 彩子

環境展では、展示や講演内容から、多様な環境へのアプローチがあることを知り、一人でも多くの方にこの企画を観てもらいたい、という思いで取り組むことができました。また一斉清掃では、歩きたばこ禁止区域にも関わらずたくさんの吸殻を拾い、周辺環境の実態を体感しました。

個人的にゴミの分別などで環境を意識することはありますが、教職員や学生の皆さんと協力し、大学を通して環境問題に取り組むことで、一層意識が向上しました。

### 小金井キャンパス東館学生食堂「愛情食堂賞」受賞に際して

施設部環境施設課主任  
戸部 幸夫

小金井キャンパスでは、老朽化した施設を約4年間かけて一新する「小金井再開発第2期工事」が進行中です。このうち2008年9月には教室や研究・実験室、体育館等から成る地上5階地下1階建ての「東館」が竣工しました。東館は、市ヶ谷の外濠校舎や法政大学中学高等学校と同じくESCO事業を導入するなど省エネルギーに配慮した設計とし、その一環として学生食堂（座席数521席）は省エネルギーや快適性に考慮した「電化厨房」を採用しています。

電化厨房とは、これまで調理の主流であったガスではなく電気を使うことで余分な水蒸気や放射熱の発生を抑え快適な室内環境を作り出すものです。その結果、空調や換気の使用量も減るため、総合的に見て省エネであり、地球環境に配慮した設計と言えるものです。

この東館の食堂は、このたび「快適厨房コンテスト2008」（電化厨房フォーラム21主催）というコンテストにて、「愛情食堂賞」と名付けられた優秀賞を獲得するに至りました。「電化厨房フォーラム21」とは、東京電力（株）が提唱して立ち上げた組織で、調理員や栄養士など食に関する企業・団体や個人が集まり、電気を使う電化厨房を通して食生活の充実と安全性の向上、さらには省エネルギー促進と

地球環境改善への貢献を図ることを目的に、さまざまな研修・広報活動を実施しています。その活動の一環である「快適厨房コンテスト」は、電化厨房の特性をうまく活かし、人と環境にやさしい厨房を実現している施設を表彰するもので、6回目となる今回は、社員食堂や病院給食施設など20点の応募があったとのことでした。

賞の選定は食の専門家7名による審査で行われ、本学の東館食堂は、1. 建物全体が環境に配慮した省エネ設計であること、2. コンパクトな厨房ながら食べる楽しさをうまく演出していること、3. 学生の嗜好や要望を献立にうまく反映させていることが受賞のポイントとして挙げられました。優秀賞を受賞した食堂には、その施設を代表するネーミングが冠せられ、本学の東館食堂は、1. 厨房をコンパクトにして客席の面積を多く確保していること、2. 天井高を高くしてゆったりとした空間を学生に提供していること、3. 献立に地方の特産メニューを月替わりで実施すること、など利用者である学生へのサービスも十分に配慮されていることが「愛情食堂賞」のポイントになりました。

今後の施設整備にあたっては、小金井キャンパス東館と同様に環境にも学生にもやさしい施設づくりを目指します。



愛情食堂で  
食べてみたいな～



## 環境改善活動推進キャラクター「えこびょん」の紹介

人間環境学部人間環境学科 4年

日高 香奈

「えこびょん」は、世界を舞台に環境問題解決のために様々な活動をしているウサギです。地球（形の気球）を背負っているのは、自分の背中に地球の未来がかかっていると思い込んでいるからです。ちなみに、法政大学カラー（オレンジとブルー）の服は母校愛の表れです。

設定は軽いキャラクターですが、「えこびょん」には大学時代の思い出がつまっています。中国での植林活動をしたフィールドスタディで現地の子供と交流したときに日本のキャラクターを書いてあげたらとても喜ばれました。キャラクターが国籍に関係なく愛される存在であることを強く感じました。また、ゼミで小学校の環境教育の授業を行った際に冊子にキャラクターを載せたら子どもが喜んで問題を解いてくれました。難しい環境の話もキャラクターが楽しく教えてくれるのならば子ども達が興味をもって取り組んでくれることに感動しました。

また、サークルでは子ども向けのボランティア活動をしていました。児童館や保育園で年6回ほど人形劇公演を行っていました。台本からキャラクターまで全て学生で考えました。子供向けの人形劇の特徴としては、うまく行きすぎる話では子ども達の共感を得ることができな

いということです。どうやったら子ども達にメッセージが伝わるのかを工夫しました。劇を見ている子ども達が笑ってくれる事にたまらなくやりがいを感じました。そういった経験があったからこそ、親近感のある「えこびょん」を生み出すことができたのだと思います。

就職活動では玩具会社から内定を頂くことができました。大手のメーカーというわけではありませんが、問屋なのでメーカーや売場の情報が集められます。そして何よりも子ども達に玩具を届ける手伝いができることが嬉しいです。もしかすると、「えこびょん」をアピールするチャンスもあるかもしれません。

こういった形で大学にキャラクターを残すことができたのはとても光栄です。キャラクターは時代を反映して変化していくものです。企業がCSR活動の一環としてキャラクターを利用する機会も増えてきました。そのなかでも、大学という教育機関が環境推進キャラクターを作ることは大変珍しい例です。大学オリジナルのキャラクターとして今後、単なる「ゆるきゃら」ではなく環境活動のために様々な主体を結びつけるキャラクターとして、自由にびょんびょん飛び回ってくれたら嬉しいと思います。



環境改善活動推進キャラクター「えこびょん」



中国で植林活動を行うフィールドスタディに参加（左端が日高さん）



ボランティア活動で人形劇の公演（後列の右から二番目が日高さん）



「第9回環境展」に巨大環境藝術が出現 縦2m37×横3m

# 2

## 環境教育・研究活動

## 活動に参加して（市ヶ谷・多摩環境委員会）

市ヶ谷地区の教育活動の  
グリーン化について

市ヶ谷地区環境管理責任者・市ヶ谷環境委員会委員長  
人間環境学部教授  
堀内 行蔵

市ヶ谷環境委員会副委員長 人間環境学部教授  
田中 勉

大学の環境改善活動は、キャンパスの施設管理のグリーン化と教育研究活動のグリーン化の2つに大別されます。本学では、ISOの10年間の経験をふまえ、2008年度から教育研究活動のグリーン化に専念する環境委員会がスタートしました。新しい環境委員会は、これまで行ってきた環境教育部会の活動を継承し、それをさらに発展させることを目的にしています。メンバーは、EMS委員の教員が中心になっています。そこで、まずサステナビリティ教育を研究するための小委員会を設け、セミナーを開催しています。活動の詳細は、次号の環境報告書で報告いたします。

小委員会の活動に加え、環境教育部会を引き継いだグリーン化活動は、2008年度にさらに発展しました。

## ■「サステナビリティ教育研究小委員会」が発足しました

「サステナビリティ教育とは何か」を調査研究し、市ヶ谷キャンパスでの導入の可能性を検討するために、「サステナビリティ教育研究小委員会」が発足しました。

2009年3月には、東京大学名誉教授の宇沢弘文氏を講師にお招きし、「リベラルアーツを考える 一社会的共通資本としての教育」をテーマに講演会を実施しました。



宇沢弘文東京大学名誉教授

## ■「第9回環境展」を開催しました

2008年10月20日から24日まで、外濠校舎1階メディアラウンジを主な会場として、「第9回環境展」を開催し、学内の会場で使用する電力のすべてにグリーン電力（東京都・小水力）を使用しました。10月23日(木)には、(株)セブン&アイ・ホールディングス総務部環境推進担当シニアオフィサーの山口秀和氏に「セブンイレブンにおける環境に対する取り組み」をテーマに講演いただきました。

また、従来からの取り組みに加えて、国内においても注目が集まっている「生物多様性」について特別展示を企画しました。更に、縦2m37cm、横3mの環境をテーマにした巨大な芸術作品も出展されました。

## ■谷津干潟自然体験エコツアーを実施しました

2008年8月20日(水)に千葉県習志野市の谷津干潟を訪れました。当日は、谷津干潟自然観察センター職員の方々による講義、干潟体験ゾーンにおける生物の観察、野鳥観察を通して、干潟における生物の営み、生物同士のつながり、渡り鳥の中継地としての干潟の役割等について学びました。



貝の観察中

## ■千代田エコシステム（CES）を推進しています

本学と千代田区の事業協力協定に基づくCES（千代田エコシステム）ゼミの活動も3年目を迎え、個人の環境配慮行動を促進する仕組みの構築と実践を進展させてきました。

例えば、3つのプログラムのうち「ちよだ検定」（区の自然や歴史・環境などに関するクイズに答える）では区立小学校の協力を得て、検定に解答した後、環境配慮行動の実行を「マイエコ宣言」として表明してもらい、一定期間継続して実行し、その結果どれだけのCO<sub>2</sub>削減を達成したかを記入する方式を取り入れるなど新たな試みを行いました。

また、第4回「シンポジウム」を2009年2月13日(金)に千代田区役所1階の区民ホールで開催し、グループワークではゼミ生たちが「環境問題を、他人ごとではなく、いかにして自分のこととして関わっていくか」について参加者（区民・企業関係者）と活発に意見交換を行いました。



2009年2月にシンポジウムを開催しました

## 多摩地区における 2008年度の環境教育・ 研究活動について

多摩地区環境管理責任者・多摩環境委員会委員長  
社会学部教授  
池田 寛二



自然豊かな多摩キャンパス

2008年度の多摩地区における環境教育・研究活動の中で何よりも特記しなければならないことは、多摩キャンパスの「里山」の実態調査に着手したということです。多摩キャンパスでは、東京都の町田市と八王子市、そして神奈川県相模原市という2都県3市にまたがる824,000m<sup>2</sup>の広大な校地で日々教育・研究活動を営んでおります。しかも、そのうちの461,510m<sup>2</sup>（全校地の56%）は森林として保存されております。この森林は、法政大学が移転するまでは、地元の住民の皆様によって、生活に密着した「里山」として活用されつつ維持されてきた長い歴史をもっております。しかし、1984年に多摩キャンパスが開設されて以来、この豊かな「里山」のほとんどの部分は事実上放置されたまま、すでに四半世紀近く経過しようとしております。しかし、近年、気候変動や生物多様性の減少に代表される地球環境問題への対処という面でも、地域の景観や自然環境の保護という面でも、「里山」の保全や再生は喫緊の課題となっております。そのような現状に鑑み、多摩環境委員会では、学内外のさまざまな立場の皆様から極力幅広くご意見やご要望をおうかがいしながら、キャンパス内の「里山」の実態調査を実施し、今後の本格的な整備の方向性を見定めてゆくこととしました。

調査は、2008年10月から12月にかけて、委託業者の(有)サトウ草木代表の佐藤好延氏（相模原市津久井町を拠点にして、森林整備事業に献身的に取り組んでおられる方）を中心に、森林総合研究所の専門家にもご協力いただきながら、調査活動を実施しました。

今回の主な調査項目は、樹種、胸高での幹周囲長、樹高、地形情報（斜面方位、傾斜度など）、林床植物の概況などです。今回の調査により、多摩キャンパスの森林にはタケ類も含めて32種の樹木が現存し、そのうち26種が落葉広葉樹であること、樹種として最も個体数が多いのはコナラで全体のおよそ4分の1を占めていること、したがって、多摩キャンパスの森林はコナラを優占種とする典型的な二次林であり、いわゆる「里山」の景観をそなえた森林だといえることなどが、科学的な実測にもとづいて明らかになりました。（調査方法の詳細については、紙幅の余裕がないため別の機会に譲ります。）

また、今回の調査によって得られたデータにもとづいて、EMS委員であり植物生態学がご専門である社会学部の鞠子茂教授は、森林の樹木バイオマスは3753tCと推計できること、これからも成熟の余地が大きいいため、その分さらに多くの炭素を蓄積し得ること、また、今回は土壌の実体を調査していないが、土壌まで含めればさらに大きな炭素蓄積量に達していると推計できる、と解説しておられます。

2009年度は、このような推計をさらに実測によって検証するために、炭素の吸収・蓄積・循環機能をより詳細に明らかにするとともに、低木や草木や土壌の実態、保水効果、動植物の生息状況、防災効果などを、科学的により深く解明できるよう、引き続き調査を進めてまいります。

## 建築

## 自然なるものへの直観を取り戻そう

デザイン工学部建築学科教授  
富永 譲

建築を設計するときは、まず敷地の周辺の模型から作り始めます。敷地を何度も訪れたり、模型と向き合っているうちに、敷地のなかに建つべき建物の姿や形がおぼろげに浮かびあがってくる訳です。つまり、建物だけが建築ではなく、周囲の環境との関わり合いの仕方のなかに、人間の生活の場を創る、建築の役割の大半があるということです。ここで環境というのは、自然のこともあれば、まわりの建築群のこともあります。しかし、この当たり前前のが、建築を設計していると、ややもすれば見失われて、人間の空間や環境は、建築によってのみ生み出しているかのような錯覚にとらわれがちです。指導している学生たちの製図やその説明を聴いても、そんなところが多々見られます。私は最近、新しい建築を設計するとは、そんな、自然や建物群といった〈大地の空間〉に人工的な地形を創ることだということを強調しています。

〈学校という建築の地形〉は、先生が生徒に自らの知識や経験を伝える場所であると同時に生徒同士の出来事<sup>ハブニング</sup>の場であり、また自らに向き合い、自然の移り変りに触れ、季節や天候の変化のなかで、生きる体験を深めて、記憶を積み重ねてゆく場所として創られている必要があります。21世紀のとはば口に立って、地球という天体がほんのちっぽけな有限でしかなかったことを知り、その環境破壊が今やとりかえしのつかないところまできているという否応ない認識から、あわてて、環境にせよ、エコにせよ、枝葉にわたる科学技術のさまざまとして取沙汰され、メディアを賑わし、マーケットの謳い文句になっている。しかし、むしろ、あらゆる技術に先立って、〈人間の居住の場所〉に関わる本質への直観がすでに人間には備わっている。環境的な数値を操るばかりでなく、建築の〈佇まい〉のなかに、すでに、自然を破壊しない知恵や環境への対応を読みとる能力を持っていることを技術者は振り返ってみることが必要な時代になっていると思います。そんな自然への感性、〈本性への直観〉を覚醒させることこそ今一度、訴えたいことです。

2008年度日本建築学会作品選奨やJIA環境建築賞を受賞した成増高等看護学校はそんな気持ちから設計されています。



## 地域

## 大学が関与する持続可能な地域づくり

現代福祉学部准教授  
保井 美樹

少子高齢化や人口減少は、農村部だけの問題ではありません。都市部、とりわけ団地の多い地域でも、これらは大きな課題です。現代福祉学部保井ゼミナールが、2006年度から活動している多摩ニュータウンの諏訪永山地域も、街が作られてから約40年が経過して、これらの傾向が顕著になっています。

保井ゼミの活動は、この地域の住民が最寄品を調達できるように作られた近隣センター(商店街)を足場としています。ここも店主の高齢化、頻発する空き店舗等の問題に直面しており、住民ニーズの変化に対応し、機能の再編を進めなければ存続も危うい状況です。保井ゼミでは、2006年度に、店主へのインタビューなどを踏まえて大学と連携した商店街の活性化構想を提案して以来、この「大学連携」をテーマに活動を行っています。2007年度は、商店会と学生が協力して、長く商店街から消えていたお祭りを復活させ、地域に多くの子どもたちを呼び込むことに成功しました。これはメディアにも大きく取り上げられ、保井ゼミと地域の絆も強化されました。2008年度は、お祭りの支援を行いながら、これからの近隣センターの機能を考えるための調査も行いました。

こうしたゼミ活動を行う中で、地域にも変化が見え始めました。第一に、空き店舗の一つが、お祭りでの仮使用を経て、地域のNPOによるまちづくり拠点となりました。第二に、近隣の大学間連携が進み、「たま学生連合」が結成され、2009年3月には、学生たちが地域で行った研究の合同発表会も行われました。今後のゼミでは、進み始めた大学連携の機運を活かして、2006年に提言した「近隣の大学群と連携するまちづくり」をいかに目に見えるものにしていくかが課題です。大学だけではなく、地域の小中学校、NPO、住民とのネットワークを発展させ、ソーシャルキャピタルの形成に寄与したいと思います。



お祭りの様子

## 自然と人間の関係を考える視点

文学部地理学科教授

伊藤 達也

地理学は自然科学に属する自然地理学から人文・社会科学に属する人文地理学にわたる、大変間口の広い学問です。もちろん、その全ての領域をフォローしながら教育・研究に従事することは至難の業ですが、ある意味古典的とも言える「自然と人間の関係」を真正面から扱うことを諦めてこなかった地理学の歴史は、改めて環境問題に関心が集まる現在、評価に値すると思っています。

地理学が環境問題にアプローチする際のユニークさは、絶えず自然現象のメカニズムと人間の社会経済活動のメカニズムの双方を視野に入れて対象を捉えようとする点です。私の研究分野で言えば、一方に自然の水循環の健全性を念頭に置きながら、他方で歴史的に形成されてきた水利用システムの分析・評価を行い、その上で現在の水資源開発の問題点を考えるということになります。さらにこうした水資源研究の一方で、地域の発展や成長を考える地域経済研究を行うという、もう一回り広い研究テーマのバランスの取り方もあります。その結果、私が担当するゼミ生の卒業論文は環境保全に関わるものから地域経済に関わるものまで大変幅広く、2008年に地理学科学学生と行った現地研究（フィールドワーク）のテーマは「名古屋の産業観光」と「霞ヶ浦の環境保全」でした。

地域開発と環境保全の両立は難しく、絶えず対立関係で捉えられがちなテーマです。しかし、目指すべきは決して「開発か、環境か」の選択ではなく、両者の安易な接合でもありません。「持続可能な環境に支えられた持続可能な社会の構築」を求めて試行錯誤を繰り返すことであり、絶えず中間的な結論であることを了解しながら、問題と向き合い続けることです。学生には「結論を急ぐな、もっと考える」と言っています。



霞ヶ浦現地研究（霞ヶ浦研究所）



名古屋現地研究（トヨタ産業技術記念館）

## 屋上緑化プロジェクトと水気耕栽培システム

国際文化学部教授

堀上 英紀

市ヶ谷キャンパスの屋上緑化プロジェクトは、2003年度の法政大学学生懸賞論文に投稿された国際文化学部生の論文「屋上緑化計画 一市ヶ谷 on キャンパス」がキッカケとなって、翌年58年館屋上とポアソナードタワー4階のテラスに芝生や花壇および池が設置されたことが始まりです。

2007年に外濠校舎が完成すると、その屋上の一角には最新式の設備（水気耕方式）を伴う屋上緑化コーナーが設けられ、NTTファシリティーズ社の管理に基づくサツマイモ緑化プロジェクトが稼働し始めました。

今年度サツマイモ緑化プロジェクトを担当するに当たって、病気に強いサツマイモの種類を選ぶと共に、その対照実験として、同種の苗を58年館裏の菜園コーナー（地上）にも植えて、外濠校舎屋上のサツマイモと比べることにしました。その際、公募で集まった市ヶ谷キャンパスの学生達と菜園コーナーを地表から50cm掘り下げて、大量のコンクリート廃材などのガラクタを取り除く作業をした上で、サツマイモの生育状況や温度・照度などの測定、および自作の自然農薬による害虫駆除を行いました。

そのような最中、10月に外濠校舎屋上のサツマイモの蔓が突如すべて伐採されるというトラブルが起こり、比較する本体が無くなる事態となり、プロジェクトは中止せざるを得なくなりました。

今年度のプロジェクトを振り返って気付いた点は、(1)試作の自然農薬を用いた58年館裏菜園コーナーのサツマイモの害虫被害は、化学農薬を用いた外濠校舎屋上のものよりもはるかに少なかったこと、(2)58年館裏菜園コーナーは、サツマイモの収穫量から見ると、日照条件や土壌の肥沃度など外濠校舎上との比較実験には問題があること、(3)市ヶ谷環境センターに測定器具が揃っていなかったこともあり、複数学部（院生を含む6学部約60名）からなる学生主体の観測態勢がスムーズに機能しなかったこと、です。

このプロジェクトが当初予定された大都会のヒートアイランド現象対策を意図するのであれば、早急に費用対効果など納得できるデータを示す必要があると思います。



2008年度から利用開始した58年館裏の菜園コーナー

## 化学

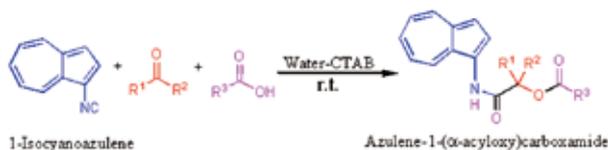
## 有機合成のグリーン化を目指して

生命科学部准教授  
佐藤 耕一

当研究室では、医薬用アズレン化合物の合成の研究を行っています。その合成の過程で環境負荷の大きい有機溶媒の代わりに、安全で安価な水を媒体として用いることで、グリーンケミストリーの実現を目指しています。

## 1) 多段の合成反応をOne-Pot化

目的とする医薬用化合物を合成するには、今までは多段の反応と、さらにその反応毎に抽出・精製操作が必要であったため、目的物を得るためには多くの無駄がありました。この10年の間に、特に医薬品の合成分野では多段の反応を1つにまとめ、1つの反応容器で目的物を得ようとするOne-Step, One-Pot化が進んでいます。私たちも多数のアズレン誘導体合成においてOne-Pot化を進め、従来の反応より高収率で目的物を得るための開発をしています。



生体活性を持つアズレンアミド誘導体の水中でのOne-Pot合成例

## 2) 水中での有機合成

有機合成のグリーン化において最大の問題は、ほとんどの反応が環境負荷の大きい有機溶媒で行われることでした。そこで、環境に優しい水を媒体として使うことが考えられました。しかし固体のアズレン類では室温、水中での反応は不可能とされてきました。そこで、アズレン類を粉末にして、それを界面活性剤 (SDS, CTABなど) で水中に分散させてOne-Pot反応を行っています。特に脱水を伴う反応では、ミセル化により有機溶媒での反応より高収率になることが明らかになっています。

## 3) 反応容器のミニ化

研究室の廃棄物量を減らすために、使用する試薬量を少なくして反応をミニ化 (現在は約5mL) しています。さらに将来、生成物の分離・未反応物のリサイクルシステムと組み合わせ、机の上を製造工場にすることを目指しています。

## 社会

## eco検定資格取得を目指したゼミの取り組み

社会学部教授  
鞠子 茂

私は2008年4月より法政大学に移ってきた生物学担当の新任教員です。それ以前は、理系の大学で環境問題を強く意識した授業と研究指導を行ってきましたが、文理融合の環境教育を実践するために法政大学に came。その理系の新任教員が本学のゼミ (演習1) において行った環境教育はエコ検定資格の取得でした。この小文では、その実験的な取り組みについて紹介したいと思います。

eco検定 (正式名称「環境社会検定試験」) は東京商工会議所が2006年からスタートさせた資格試験であり、「環境に対する幅広い知識を持ち、社会の中で率先して環境問題に取り組む“人づくり”を目指す」ことを目的にしています。試験は7月と12月の年2回です。まだ歴史の浅い資格試験ですが、2008年度の試験では、約37,000人が受験しています。

eco検定ゼミを希望した学生は9名でした。最初のゼミで、私が課した課題は二つありました。一つは12月の受験で全員合格すること、もう一つはモチベーションを維持することでした (一人一人に決意表明もさせました)。合格に向けて、前期は環境関連の基礎知識の習得を中心にした学生によるミニ講義、後期は模擬試験およびテーマ別試験を行いました。しかし、受験までの道のりは決して順調ではありませんでした。とりわけ、課題の二つ目に挙げていたモチベーション低下の問題は前期後半から深刻になりました。決意表明なんかどこへやらの状態でした。そこで、モチベーションアップのための夏合宿を行うことにしました。これが功を奏したのか、後期からは競争意識も芽生えて比較的順調に進みました。

手探り状態で始めたeco検定ゼミでしたが、ゼミ生9名のうち8名が受験し、7名が合格証を手に入れました。不合格の学生は合格点にわずか1点ならず、本当に惜しい結果でした。事情により未受験だった学生は2009年7月に受験する予定です。彼らは、このゼミを通じて環境問題に対して自分の意見を述べる術を身につけただけでなく、目標を達成したことで大きな自信を得ました。私自身もこのゼミを通じて多くのことを学ぶことが出来て、学生諸君に感謝しています。そして、この経験を2009年度以降のゼミにいかしていきたいと思っています。

## 環境・文化インフラの創造

デザイン工学部都市環境デザイン工学科教授  
高橋 賢一

私の研究室ではここ数年、エコ地域デザイン研究所が進める水辺都市の再生に取り組んでいます。理由はようやく市民権を得た緑の保全に次いで水辺が重要な環境資源と考えたからです。水面はヒートアイランドをやわらげ、動植物の多様な生息を促し、CO<sub>2</sub>の吸収などエコシステムの要となります。また川を見下ろす高台には古くから神社仏閣が建ち、人々の生活を見守り続けてきました。さらに豊かな水辺をもった港町や城下町などの歴史都市を誕生させ、わが国固有の都市文化を開花させました。

私たちが目指す水辺再生は限られた一部空間にとどまりません。水系をさかのぼり源流域の森林保全も視野に入れたビジョンを描くことです。流域圏再生のコアはそれぞれの土地固有の地形と日々の暮らしの積み重ねがつくった水と緑と路の帯で、都市のエコ化に欠かせない環境・文化インフラといえます。かつてこうした空間は市街地のあちこちに見られましたが、今日では断片的で有機的な結びつきに欠けています。私たちはこの失いし貴重な価値資源を広げ整え、つなぎ、よりヒューマンな装置に蘇生させるもので“歴史・エコ廻廊”と称しています。この廻廊は清涼な水や風の道となり、美しく個性的な景観をつくり、非常時には防災空間となります。何よりも人々の心に潤いや安らぎを与え、新たな生活文化の発信が期待されます。

私たちは百年の大計に立って壮大な構想づくりに挑みます。構想づくりの具体的フィールドは本学の3つのキャンパス、それぞれにあります。例えば市ヶ谷では国指定の史跡である江戸城外濠、日本橋川や神田川などが挙げられます。また小金井や多摩地域では日野の用水路や野川を育む国分寺崖線などです。学生たちは街中の研究実験室で現場を熟知した市民や自治体職員との交流を通して様々な課題を知り、解消策などを学びます。



“環境・文化インフラ”をテーマとした研究フィールド  
 <左写真>：国指定の史跡江戸城外濠  
 <右写真>：戦国末より敷設されたとする日野の用水路。

## 森と人のポリフォニー

人間環境学部専任講師  
安岡 宏和

中央アフリカの熱帯雨林には、ピグミーとよばれる人びとが住んでいる。今日では道路沿いの集落に居をかまえてはいるものの、一年のうち半分は森のキャンプでの狩猟採集生活をおくっている。野生の動植物を朝から晩まで探しまわっているようすを想像するかもしれないが、そんなことはない。昼下がりにになると、人びとはキャンプにもどってきて、昼寝をしたり、夕食の準備をしたりしている。

森での主食は数種のヤマノイモである。これらのヤマノイモは遺伝的には野生種であるが、それらが森のなかに広く分布するようになる過程において、意図的なもの非意図的なもの、直接的なもの間接的なものをふくめて、なんらかの人間の関与があったのではないかと私は考えている。イモの一部を植えなおすこともあっただろうし、木を切ってキャンプをつくることで、ヤマノイモが育ちやすい明るい環境ができたことも考えられる。あるいは数百年から千年単位のスケールでみると、人びとが集落をつくりながら移動生活をするのにもなると、ヤマノイモが熱帯雨林のなかに分布を広げてきた可能性もある。こうしてみるとピグミーたちは、けっして手つかずの原生林のなかで食物を探しているのではなく、かれらが生活することそのものが、食物が育ちやすい環境をつくっているといえるのである。

ところでピグミーたちは、特徴的な歌をうたう。異なるリズムをもつ歌声が折り重なり、一体となって響きわたる、ポリフォニーとよばれる合唱法である。日々の採集から集落の移動まで、さまざまな時間軸のなかで、人びとの活動が幾重にも熱帯雨林の景観に影響をあたえ、それにおうじて食物の分布が拡大する。そのなかで人びとの生活もまた変容していくさまは、まさに森と人のあいだに木霊するポリフォニーといってよい。ピグミーたちの生活と、かれらが住んでいる熱帯雨林を一体のものとして理解しようとするとき、われわれもポリフォニー的に思考せざるを得ないのではないだろうか。



ヤマノイモの一種を採集した女性

## 学部

## 市ヶ谷基礎科目・総合科目

## ▼環境関連科目

基礎ゼミ, 健康の科学Ⅰ・Ⅱ, 哲学Ⅰ, 倫理学Ⅱ, 宗教論Ⅰ・Ⅱ, 芸術Ⅰ・Ⅱ, 法学Ⅰ, 法学Ⅱ, 地理学Ⅰ・Ⅱ, 原子から宇宙までⅠ・Ⅱ, 生命科学Ⅰ・Ⅱ, 物質と環境Ⅰ・Ⅱ, マスメディアの英語Ⅰ・Ⅱ, 環境倫理学, 人間と地球環境, 都市文明と自然, 自然環境のしくみとその変貌, バイオテクノロジーの歴史と現状, 地球環境の科学, Aspects of Modern SocietyⅠ, フランス語講読Ⅰ・Ⅱ, 時事ロシア語Ⅰ, 中国の文化と社会Ⅱ

## 法学部

## ▼ゼミナール

五十嵐敬喜(都市政策論), 太田九二(有機化学), 岸井大太郎(経済法), 竹内昭(哲学), 多谷千香子(国際人権・人道法), 月井雄二(生物学), 名和田是彦(公共哲学・社会哲学・コミュニティ論), 宮本健蔵(民法), 武藤博己(行政学)

## ▼環境関連科目

社会政策(一部・二部), 環境政策, 公共投資論, NPO論, 都市政策(一部), コミュニティ論, 国際政治学(一部・二部), ラテンアメリカの政治と社会(一部・二部), アフリカの政治と社会, Global Governance, 外交総合講座, 国際行政学, 国際機構論, 国際NGO論, 自治体国際協力論, 国際人権法, 国際環境法, 演習(都市政策)(一部), 演習(コミュニティ論), 演習(国際平和と開発), 演習(公共政策), 演習(行政学), 演習(NPO論), 法律学特講(企業法務の実務), 経済政策(二部)

## 文学部

## ▼ゼミナール

## ■史学科

小倉淳一(日本考古学)

## ■地理学科

伊藤達也(人文地理学・水資源研究), 漆原和子(土地地理学・カルストロロジー), 小寺浩二(自然地理学(海洋陸水学)), 佐藤典人(自然地理学(気候気象学))

## ▼環境関連科目

## ■全学共通科目

歴史地理学

## ■哲学科

倫理学概論, 美学・芸術学2

## ■史学科

日本史概説Ⅰ・日本史概説(2), 考古学概論, 日本考古学

## ■地理学科

地理学概論(1)・(2), 地理実習(2), 現地研究, 地誌学概論(1)・(2), 日本地誌(2), 地球科学概論Ⅰ・Ⅱ, 地学実験(コンピュータ含む)(1)・(2), 地質岩石学及び実験, 自然環境論, 地形学及び実験Ⅰ・Ⅱ, 生物・土壌地理学及び実験Ⅰ・Ⅱ, 気候・気象学及び実験Ⅰ・Ⅱ, 海洋・陸水学及び実験Ⅰ・Ⅱ, 社会経済地理学(2)・(3)・(4), 文化地理学Ⅰ, 自然地理学演習(1)~(3), 世界地誌(1)・(5), 地理学読図演習(1), 自然地理学特講(2)・(4), 人文地理学特講(2), 外書講読(1), 地理情報システム(GIS)Ⅱ

## 経営学部

## ▼ゼミナール

## ■市場経営学科

木原章(生物情報学, 細胞生理学), 寺井公子(公共経済学, 政治経済学), 中田和秀(物理有機化学, 計算機化学)

## ▼環境関連科目

演習・演習1~6, 経営社会学・経営社会学Ⅱ, 管理会計論・管理会計論Ⅰ・Ⅱ, サービスマネジメント論Ⅰ

## 国際文化学部

## ▼ゼミナール

中島成久(文化人類学/カルチュラル・スタディーズ/インドネシアのポスト・コロニアリズム研究/アジアの開発と環境), 堀上英紀(細胞生理学・アメーバ学・性科学)

## ▼環境関連科目

ネット文化論, 国家と民族, 実践国際協力, 情報文化演習-食と性の比較文化-, 国際社会演習-コンフリクトの解明-

## 人間環境学部

## ▼ゼミナール

石神隆(地域形成論, 地域経済論, 都市環境論), 井上奉生(地理学, 陸水学, 環境科学), 大西弘(理論物理学), 岡松暁子(国際法, 国際環境法, 国際原子力法), 梶裕史(日本古代文学, 民俗学), 菊地邦雄(自然保護政策論, 自然環境保全計画論), 國則守生(環境経済論, 国際環境政策), 小島聡(行政学, 地方自治論), 後藤彌彦(行政法, 環境法), 下村恭民(経済協力論, アジア経済論), C・P・シーゲンターラー(環境経済学, 経済システム), 関口和男(宗教現象学, 環境哲学), 田中勉(フィールド調査論), 谷本勉(地球科学史), 永野秀雄(日米比較法, 環境法, 先端科学技術法, 労働法), 長峰登記夫(労働環境論, 労使関係論), 西城戸誠(環境社会学, 社会調査論, 地域社会学), 根崎光男(日

本環境史, 近代美術史), 日浦幹夫(スポーツ医学, リハビリテーション医学), 藤倉良(環境システム科学), 堀内行蔵(環境経営論), 松本倫明(環境シミュレーション), 安岡宏和(環境人類学, アフリカ研究), 山本長一(現代英米文学), 吉田秀美(発展途上国の社会開発, 貧困問題, マイクロファイナンス), 渡邊誠(計算科学, 物性論)

## ▼環境関連科目

人間環境学入門, 環境科学入門, 基礎演習, 英語Ⅲ, 国際政治学, 環境法Ⅰ~Ⅲ, 労働環境法, 製造物責任法, 国際環境法Ⅰ・Ⅱ, 地方自治論Ⅰ・Ⅱ, ミクロ経済学Ⅰ・Ⅱ, 公共経済学, 環境経済論Ⅰ・Ⅱ, 環境経営論Ⅰ・Ⅱ, 環境経営実践論Ⅰ・Ⅱ, 環境会計論Ⅰ・Ⅱ, 国際環境政策, 途上国経済論Ⅱ, 国際経済協力論Ⅰ・Ⅱ, 環境調査論, 現代社会論Ⅰ・Ⅱ, フィールド調査論, 地域形成論, 地域経済論, 地域コモンズ論, 都市環境論, 環境社会学Ⅰ・Ⅱ, 労働環境論Ⅱ, NGO活動論, 社会開発論, 環境哲学基礎論, 環境表象論, 日本環境史論Ⅰ・Ⅱ, 環境人類学Ⅰ・Ⅱ, 自然環境論Ⅰ~Ⅴ, エントロピー論, エネルギー論, 地球科学史Ⅰ・Ⅱ, 環境モデル論Ⅰ・Ⅱ, 地球環境論ⅠA, 環境保護論Ⅰ, 公害防止管理論Ⅰ・Ⅱ, リサイクル論, 環境教育論, 人間環境特論, 研究会, 人間環境セミナーⅠ・Ⅱ

## キャリアデザイン学部

## ▼ゼミナール

荒川裕子(西洋美術史, 芸術と社会), 小門裕幸(地域経営論, 事業創成論, 事業経営論), 笹川孝一(生涯学習学, 多文化教育論), 佐藤一子(社会教育論), 田中研之輔(都市・地域社会学, 現代社会理論, 社会調査法), 外川洋子(流通サービスビジネス論, キャリア体験学習), 中野貴之(会計学), 松島英子(古代オリエントの歴史・文化史), 八幡成美(職業能力開発, 人事労務管理, 経営工学), 山田泉(日本語教育学, 多文化教育学)

## ▼環境関連科目

## &lt;2003~2006年度入学&gt;

生涯学習入門Ⅰ・Ⅱ, 人材育成入門Ⅰ・Ⅱ, 世界の生活文化基礎演習, 学習社会論Ⅰ・Ⅱ, 教育行政論Ⅰ・Ⅱ, 芸術と社会Ⅱ, 異文化適応と言語教育Ⅰ・Ⅱ, アジア学Ⅱ, 生活ビジネス論A・B, フードビジネス論, 流通・サービスビジネス論, 公共サービス論, NPO論, 特別講義グローバルビジネス特講C, コミュニティビジネス特講B, ITプロフェッショナル実務, 技術管理プロフェッショナル実務, 生

涯学習の機会と空間Ⅱ，産業文化論，歴史と文化Ⅰ・Ⅱ，旅と生活文化論，グローバルコミュニティC，管理会計論Ⅰ・Ⅱ，演習Ⅰ・Ⅱ

#### <2007年度以降入学>

生涯学習入門Ⅰ・Ⅱ，文化入門Ⅱ，コミュニティ入門Ⅰ・Ⅱ，現代社会と遊び，人と歴史と文化Ⅰ・Ⅱ，日本のコミュニティと文化Ⅰ・Ⅱ，アジアのコミュニティと文化Ⅰ・Ⅱ，人材育成論Ⅰ，市民社会と地域マネジメント，日本の製造業，グローバルコミュニティ，教育マネジメントⅠ・Ⅱ，NPO論，社会とアートⅡ，異文化適応と教育Ⅰ・Ⅱ，マーケティングプロフェッショナルA，先端産業論，生活ビジネス論（フードビジネス），公共サービス論，産業文化論，開発教育，教職入門，社会・公民科教育法，社会教育計画，現代生活・文化と社会教育Ⅰ（東アジアと生活1）

## デザイン工学部

### ▼ゼミナール

#### ■建築学科

安藤直見（建築計画・都市計画），大江新（建築設計，都市計画），後藤剛史（建築環境），陣内秀信（都市史・建築史），高村雅彦（都市史・建築史），出口清孝（建築環境），富永譲（建築設計・建築計画），永瀬克己（地域・建築・造形デザイン），渡邊真理（建築設計およびアーバンデザイン）

#### ■都市環境デザイン工学科

岡泰道（環境システム系・環境水文学），草深守人（環境システム系・地盤工学），高橋賢一（都市プランニング系・地域計画，都市計画），溝瀧利明（施設デザイン系・建設材料学），満木泰郎（施設デザイン系・コンクリート工学），宮下清栄（都市プランニング系・都市計画・空間分析），森田喬（都市プランニング系・空間情報科学）

#### ■システムデザイン学科

大島礼治（デザイン系），竹内則雄（エンジニアリング系），武田洋（エンジニアリング系），田中豊（エンジニアリング系），西岡靖之（マネジメント系），野々部宏司（マネジメント系）

### ▼環境関連科目

#### ■共通基礎科目

エコノミクス，法学概論2（日本国憲法1単位含む），技術者倫理（建築），開発と国際協力（建築），環境とエネルギー，日本の工業技術B（留学生のみ）

#### ■専門基礎科目（学科共通）

デザイン工学入門，バイオエンジニア

リング，ケミカルエンジニアリング，デザイン理論（都市）

#### ■専門科目（学科共通）

デザインスタジオ1・2（都市），サステイナブルデザイン，デザイン史，ランドスケープデザイン，環境政策と国土，環境工学，タウンマネージメント，機器・設備デザイン（建築）

#### ■建築学科

建築入門，建築気候，光・視環境，空気調和設備

#### ■都市環境デザイン工学科

測量学演習，国土形成史，河川環境工学，地域デザイン概論

#### ■システムデザイン学科

ヒューマンセンタードデザイン

## GIS（グローバル教養学部）

### ▼環境関連科目

Law II（Including the Japanese Constitution 1 unit）（後期），Readings in World Literature（前期）

## 市ヶ谷キャンパス教職科目

（法学部，文学部，経営学部，国際文化学部，人間環境学部，キャリアデザイン学部，デザイン工学部）

### ▼環境関連科目

#### ■教職に関する科目

教職入門，社会・地歴科教育法，社会・公民科教育法，工業科教育法

#### ■教科に関する科目

哲学Ⅱ，人文地理学Ⅰ・Ⅱ，自然地理学Ⅰ・Ⅱ，地誌Ⅰ・Ⅱ，生物学概論，国際政治学，デジタル情報学概論

## 市ヶ谷キャンパス資格科目

（法学部，文学部，経営学部，国際文化学部，人間環境学部，キャリアデザイン学部，デザイン工学部）

### ▼環境関連科目

社会教育計画，現代生活・文化と社会教育Ⅰ（東アジアと生活1）

## 経済学部

### ▼ゼミナール

伊藤陽一（統計学），絵所秀紀（開発経済論），岡部雅史（環境科学・生物学），粕谷信次（日本経済論），河村哲二（アメリカ経済論，世界経済論，理論経済学），黒川和美（経済政策，公共経済），貫芳祐（国際関係論），永井進（理論経済学），西澤栄一郎（環境政策論），馬場敏幸（アジア経済，技術移転，技術経営），松波淳也（環境経済学），山崎友紀（資源・環境工学，化学），山本真鳥（文化人類学，経済人類学）

### ▼環境関連科目

企業経営入門，世界の経済，現代経済学

応用A・B，企業と経済・応用A，日本経済論A・B，国際経済論A，公共経済論A・B，環境政策論A・B，環境経済論A・B，自然環境論A・B，英語セミナーA・B，世界システム論，農業経済論A・B，経済統計論A・B，環境科学A・B，時事独語セミナーA，環境と技術，アメリカ経済論A・B，ヨーロッパ経済論B，中国経済論B，企業経営論A，経済法，経営学，演習，日本史，法学，地学，化学，科学史，日本経済論（二部），経済政策論（二部），環境経済論（二部）

## 社会学部

### ▼ゼミナール

池田寛二（環境社会学，リスク社会の理論，アジア研究），岡野内正（社会理論，コミュニティ開発），島本美保子（環境経済学・森林問題），壽福眞美（社会哲学），田中充（環境政策論），田中優子（江戸時代の文学・生活文化・アジアの比較文化），東郷正美（自然地理学），船橋晴俊（社会計画論・環境社会学），堀川三郎（環境社会学・都市社会学・調査史），鞠子茂（eco検定），矢部恒彦（都市景観論）

### ▼環境関連科目

#### 一部（2006年度以降入学）

社会思想史Ⅰ・Ⅱ，環境倫理，生命の科学Ⅱ，自然環境論Ⅰ・Ⅱ，自然科学特講（生命科学），科学史，自然科学特講（地学），国際法，多摩地域形成論Ⅰ，Basic English2-Ⅰ・Ⅱ，社会政策科学入門A，社会学への招待，環境問題A・B，人間・社会論B，環境政策論，環境自治体論，環境経済学Ⅰ・Ⅱ，環境社会学Ⅰ・Ⅱ，都市景観論，社会計画論Ⅰ・Ⅱ，環境法，都市政策論，比較文化論Ⅱ，国際関係論，地域研究（アジア），南北問題，社会学理論BⅠ，政策立案実習，政策研究実習，調査研究法B，社会学総合特講，社会調査実習，演習1

## 現代福祉学部

### ▼ゼミナール

岡崎昌之（地域経営論），岡司直也（農山村経済論，農村地域政策論，地域資源管理論），萩原俊一（都市・地域環境デザイン論），馬場憲一（日本地域史，歴史学），山岡義典（非営利組織論），保井美樹（地方自治論，都市論，都市計画）

### ▼環境関連科目

社会思想史，現代福祉論，現代レジャー論，地域史入門，地域創造入門，バリアフリー概論，リハビリテーション概論，コミュニティ心理Ⅰ，地域経営，地域政策，地域文化政策，まちづくりの思想，地方自治論，都市と環境，人と環境，都

市住宅政策論Ⅰ・Ⅱ, コミュニティデザイン, 地域ツーリズム, 文化環境創造論, 地域遺産マネジメント論, 地域づくり特講, 居住福祉, レクリエーション論, 専門演習, 地域づくり実習, 地域づくり実習指導

## 多摩キャンパス教職科目・資格科目 (経済学部・社会学部・現代福祉学部)

道徳教育の研究, 特別活動論, 人文地理学Ⅰ・Ⅱ, 自然地理学Ⅰ・Ⅱ, 地誌Ⅰ, 国際法, 国際政治論Ⅱ, 図書館特講

## 工学部

<2006年度以前入学>

### ▼環境関連科目

#### ■教養科目

哲学A, 生態学A・B, 技術社会論A・B, 健康の科学A・B, 法学B, 化学基礎実験, 基礎化学演習, 科学英語A・B, ドイツ語中級B

#### ■機械工学科

基礎熱学, 内燃機関, エネルギー変換工学, 金属材料, 宇宙工学, 音響工学, 環境学概論, 燃焼工学, 環境工学, 航空機, 技術者論理

#### ■物質化学科

基礎物質化学, 基礎物質化学実験, 化学基礎数学演習, 人間環境化学A, 物質化学演習, プロセス設計・演習A, 触媒設計論, 環境工学, 物質安全科学, 人間環境化学演習, 物質化学特講

#### ■情報電気電子工学科

電気化学, 発変電工学, 電力システム工学, 原子力工学, 電気法規および施設管理

#### ■システム制御工学科

自動車制御工学, 宇宙センシング

#### ■経営工学科

社会学, 環境経済学

#### ■生命機能学科

細菌科学, 環境生態学

#### ■建築学科

都市計画2, 都市再生論, 造園計画, 景観計画, サステイナブルデザイン, 建築光環境, 建築設備設計法2, 建築生産, 建築法規, 建築設備デザイン1, 建築研究, 卒業設計

#### ■都市環境デザイン工学科

地盤環境解析, 地域計画, 都市計画, 環境・開発行政, 工学ゼミナール, 河川工学, 水工学, 地下水環境工学, 地盤環境解析演習, 地盤環境工学, 交通計画, 都市デザイン, 都市再生プロジェクト演習, 交通計画演習, 建築環境技術論, 水環境システム, 水資源工学, 卒業研究

#### ■システムデザイン学科

化学英語, エンジニアリングエコノミ

クス, サステイナブルデザイン, ヒューマンセンタードデザイン, シミュレーション技法, シミュレーションデザイン演習, ライフサイクルデザイン(LCD), 地理情報システム(GIS), 国際社会論, 法学B, 技術社会論A・B, 生態学A

## 理工学部

### ▼ゼミナール

#### ■機械工学科

大澤泰明(先端材料工学), 川上忠重(エネルギー変換工学), 竹内則雄(デジタルエンジニアリング), 御法川学(機械音響)

#### ■電気電子工学科

斎藤利通(非線形回路)

### ▼環境関連科目

#### ■教養科目

コミュニケーション・ストラテジー, コンプリヘンシブ・イングリッシュⅠ, 哲学入門, 国際関係論, 法と国際社会(日本国憲法を含む), 先端技術・社会論, 技術者倫理, 環境と資源, 生物の多様性, 物質科学と先端技術, 健康の科学, 科学実験Ⅱ

#### ■機械工学科専門科目

環境・エネルギー入門

#### ■電気電子工学科専門科目

電気エネルギーの発生と変電

#### ■経営システム工学科専門科目

プロジェクトマネジメント入門, 社会学

## 生命科学部

### ▼ゼミナール

#### ■環境応用化学科

大河内正一(人間環境化学), 緒方啓典(物理化学, 機能性材料科学), 西海英雄(環境化学工学)

### ▼環境関連科目

#### ■教養科目

哲学入門, 国際関係論, 先端技術・社会論, 技術者倫理, 環境と資源, 生物の多様性, 科学実験Ⅱ

#### ■共通科目

グリーン・ケミストリー, 環境と人間, 植物薬理学

#### ■生命機能学専修専門科目

植物医学概論

#### ■植物医学専修専門科目

植物基礎医学, 植物病予防学, 植物病防除学, 土壌科学, 植物生産基礎実習, 植物保護士演習

#### ■環境応用化学科専門科目

応用化学基礎, 基礎応用化学実験

## 情報科学部

### ▼環境関連科目

社会と科学1

## 小金井キャンパス教職科目

(工学部・理工学部・生命科学部・情報科学部)

教育過程論, 理科教育法(4), 工業科教育法(1)・(2), 地学概論A・B・地学概論Ⅰ・Ⅱ, 地学実験(コンピュータ活用含む)

## 通信教育部

### ▼環境関連科目

#### ■春期スクーリング

地理学, 化学, 地誌学特講

#### ■夏期スクーリング

哲学, 地理学, 現地研究A(自然), 現地研究B(人文), 現地研究C(自然), 自然地理学特講, 人文地理学演習, 自然地理学演習

#### ■高松市スクーリング(7月)

総合特講

#### ■名古屋市スクーリング(9月)

総合特講

#### ■福岡市スクーリング(11月)

総合特講

#### ■秋期スクーリング

自然地理学演習, 文化人類学, 化学, 自然科学史

#### ■冬期スクーリング

化学(講義コース), 自然科学史, 文化人類学, 基礎特講, 現地研究A(自然), 人文地理学演習, 自然地理学演習, 経済学特講「環境政策と経済学」

## 大学院

(環境関連科目のみを掲載)

## 人文科学研究科

### ▼修士・博士後期課程

#### ■地理学専攻

地形学研究, 地生態学演習, 気候学研究, 気候学演習, 水文学研究, 環境科学研究, 第四紀学研究, 自然地理学文献講読, 自然地理学総合演習, 人文地理学研究, 人文地理学演習, 空間構成論研究

## 国際文化研究科

### ▼修士・博士後期課程

#### ■国際文化専攻

国際協力論

## 経済学研究科

### ▼修士・博士後期課程

#### ■経済学専攻

実証経済学, 日本経済論, 上級ミクロ経済学, 環境政策論A・B, 経済学特講

## 政治学研究科

### ▼修士・博士後期課程

#### ■政治学専攻

コミュニティ論研究、公共事業研究1・2、都市政策特別セミナー1、防災危機管理研究、NPO論1、公共政策と非営利セクター、国際NGO概論、国際政治史研究1・2、外交政策研究1・2

## 社会学研究科

### ▼修士・博士後期課程

#### ■社会学専攻

社会研究法1、調査研究法

## 経営学研究科

### ■経営学専攻（夜間設置科目）

#### ▼修士・博士後期課程

国際会計論

## 政策科学研究科

### ▼修士・博士後期課程

#### ■政策科学専攻

政策科学の基礎、政策科学ワークショップ、社会調査法A、まちづくり事例研究、都市政策事例研究、組織政策研究演習1、環境政策研究演習1～3、環境問題事例研究、環境共生事例研究、国際環境政策事例研究、NPO・市民運動事例研究、地域再生システム論、社会調査実習・資料分析1・2、政策研究実習・資料分析1・2、環境・開発制度研究

## 環境マネジメント研究科

### ▼修士課程

#### ■環境マネジメント専攻

環境法概論、環境経済学概論、環境経済学演習、インバスター・リレーションズ論、環境経営論、環境マーケティング論、環境経営実践論、中小企業EMS論、CSR論、環境会計論、環境経営事例研究、環境社会論、自治体政策研究、地域形成研究、環境政策法務と条例、自然環境共生研究、都市デザイン特論、地域環境文化研究、地域環境史研究、地域環境事例演習I、II、地域コンサルティング論、国際環境法、国際協力論I・II、国際NGO・NPO論、国際環境協力事例演習、地球環境政治論、環境行政法、環境私法、環境資源・エネルギー政策論、公共経済論、環境思想、数理モデル概論、環境マネジメント演習I・II、環境特殊研究1・2・3

## 工学研究科

### ■機械工学専攻

### ▼修士課程

音響工学特論、熱動力特論、燃焼工学特論、伝熱工学特論、流体機械特論1・2、音響システム工学特論、資源環境物理学特論、極地環境学特論、環境エネルギー技術戦略特論

### ▼博士後期課程

熱流体工学特別研究、熱流体工学特別実験、機械制御工学特別研究、機械制御工学特別実験

### ■物質化学専攻

#### ▼修士課程

環境生化学特論、水環境工学特論、環境計測特論、環境衛生学特論、環境科学特論、物質化学特別研究、物質化学特別実験

#### ▼博士後期課程

人間環境化学特別実験、人間環境化学特別研究

### ■電気工学専攻

#### ▼修士課程

電力システム工学特論2

### ■建設工学専攻（都市環境デザイン工学領域）

#### ▼修士課程

防災工学特論、土質力学特論、水資源工学特論、地域・都市計画特論、自然環境共生特論、環境技術英語特論

#### ▼博士後期課程

国土・都市・地域特別研究、国土・都市・地域特別実験・実習、水工学特別研究、水工学特別実験・実習

### ■建設工学専攻（建築学領域）

#### ▼修士課程

建築環境工学特論、建築設備特論、設備計画特論、建築史特論、環境構法特論

#### ▼博士後期課程

建築計画・構法特別研究、建築環境工学特別研究、建築環境工学特別実験・実習、建築設備工学特別研究、建築設備工学特別実験・実習

### ■システム工学専攻（システム系）

#### ▼修士課程

最適制御特論

## 人間社会研究科

### ■福祉社会専攻

#### ▼修士課程

地域文化特論I（文化環境）、地域文化特論II（ミュージアムマネジメント）、地方自治特論I・II

### ■人間福祉専攻

#### ▼博士後期課程

地域・政策系特殊講義I・II、地域・文化系特殊講義I・II

## システムデザイン研究科

### ■システムデザイン専攻

#### ▼修士課程

エンジニアリングデザイン、現代産業

論、インダストリアルデザイン論、ウェルビーイングデザイン論

### ▼博士後期課程

知能機械デザイン特別研究I～III、知能機械デザイン特別実験I～III

## 政策創造研究科

### ▼修士課程

地域再生システム論、比較行政研究、公共空間形成論、まちづくり事例研究、都市再生論、サステナブルデザイン論、都市環境論、CSR論、CSRとコーポレートガバナンス、CSRとリスクマネジメント、CSRと雇用、CSRと循環型社会

## 国際日本学インスティテュート

### ▼修士・博士後期課程

風土が作る文化I・II、日本の環境論

## 専門職大学院

### 法科大学院（法務研究科）

#### ■法務専攻

基本的人権、法哲学、環境法、憲法演習

### イノベーション・マネジメント研究科

#### ■イノベーション・マネジメント専攻

リスクマネジメント概論、マーケティング、MBA特別講義（調達業務マネジメント）、中小企業新取引論、組織イノベーション、生産イノベーション、市場戦略論

#### ■アカウンティング専攻

管理会計I・II、財務会計演習I、環境会計論

参考資料：『大学案内』2008、各学部、大学院、専門職大学院、教職・資格課程が発行したシラバス（2008年度）、「法政通信」等。

（注1）本リストは、上記であげた参考資料の記載内容をもとに作成しています。セミナーは「大学案内」を、環境関連科目は「シラバス」を参考にしています。今後内容を更新する予定です。

（注2）学部セミナーの教員氏名は五十音順にて掲載させて頂きました。

（注3）環境関連科目とは、地球環境問題、廃棄物、リサイクル、化学物質の管理、環境法規制、自然保護、自然遺産保護、持続可能な開発、地域開発、都市開発、地域計画、環境倫理、環境経済、環境経営、環境社会、環境工学、環境監査、環境マネジメントなどをテーマとして扱っている授業です。



## 第2回新宿エコワン・グランプリコンテストにおいて チャレンジ賞を受賞！

新宿区が主催する「第2回新宿エコワン・グランプリコンテスト」において、本学の市ヶ谷キャンパスの緑化の取り組みがチャレンジ賞（事業者部門）を受賞しました。詳細は、以下の受賞記念パネルをご覧ください。

平成20年度  
新宿エコワン・グランプリ

# チャレンジ賞

事業者部門

## “都心のキャンパスに憩いの場を！ ～都市型緑化への挑戦～”

### 法政大学・市ヶ谷キャンパス

法政大学の皆さんは、2004年度から、本大学が掲げる「グリーン・ユニバーシティ」の実現のため、さまざまな緑化運動に取り組まれています。その結果は着実にあらわれているようです。

#### 🐝 取り組み内容

1. 憩いの場の創造 2. 環境教育の実施 3. 都市的自然の創造 4. ヒートアイランド対策および地球温暖化対策

以上の4つを目的に、次のような活動を進めています。

- ① 学生の提案から実現した屋上庭園
- ② 都心でサツマイモ栽培
- ③ みどりのカーテンで省エネ！
- ④ オフィスで楽しめるペットボトル栽培

#### 🌱 ① 学生が提案した屋上庭園

「キャンパスに緑を！」。2つの学生グループからの提案を受け、2004年4月、市ヶ谷環境委員会に「屋上緑化プロジェクト」が設置されました。そこで学生スタッフが調査・検討を重ね、たくさんの屋上を見学。その結果、2005年3月に「オリーブ・ガーデン」と「グリーン・テラス」という2つの屋上庭園が誕生しました。これは専門家からも高い評価を得ました。その後、2006年に富士見坂校舎5階の屋上庭園、2007年には外濠校舎7階に「外濠の里」も完成しています。設計から維持管理まで学生の手で行われています。



#### 🌱 ② 都心でサツマイモ栽培

なぜサツマイモなんなのでしょう？ それは、サツマイモの葉が大量の熱を吸収するため、周辺の温度の上昇を抑制する効果があるのです。実際に調べてみたら、土壌サツマイモ表面温度と石畳表面温度の差が約10～14℃ありました。そのうえ、11月には約50kgのサツマイモが収穫されました。おいしくって地球にも優しい、一石二鳥の取り組みです。

#### 🌱 ③ みどりのカーテンで省エネ！

法政大学は、キャンパスの一部が新宿区に所在していることから、新宿区が地球温暖化対策の1つとして推進する「みどりのカーテン」プロジェクトに参加しています。「みどりのカーテン」とは、ゴーヤ等の蔓性の植物を窓際で育て、それをカーテンのようにする事で、冷

#### 🌱 ④ オフィスで楽しむペットボトル栽培

このペットボトルの鉢は、その前は柄杓（ひしゃく）でした。その柄杓は打ち水をするため、ペットボトルから手作りされたのです。打ち水とは、地面、特にコンクリートに水をまくことで、地表温度を下げ、涼しさを感じるという昔からの知恵です。最近ではこの活動が「打ち水大作戦」として、全国で実施されています（主催：打ち水大作戦本部）。法政大学もこの活動に参加しました。

このように、1つのものを機通りにも使用することを「リユース」といいます。ペットボトルに関してはリサイクルよりリユースの方が環境負荷が少ない可能性があり、注目されています。

ペットボトルが  
柄杓に変身！

噴水の雨水を使って  
柄杓で打ち水

その後、水と肥料を  
入れて水耕栽培

柄杓代も節約でき、オフィスに緑も増えました。



#### 🐝 これからにかけて

以上のような活動が、どの位の効果を生み出しているのかを知るために、2008年度、学内の数ヶ所の緑化スペースにサーモカメラを設置し、測定しました。確かに緑化の効果を実感できる結果が得られました。この実績はパンフレットにし、大学外とのコミュニケーション・ツールに活用します。

今後は、学内の緑化スペースを地域の人々とも共有できるように検討していきたいと思っています。

法政大学 環境センター

〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1  
TEL.03-3264-5681 FAX.03-3264-5545

HOSEI



## EMS審査員研修講座

法政大学環境センターでは、企業等組織の環境マネジメントシステムが有効に運営されているかどうかの審査を行えるEMS審査員の資格を取得できる講座を準備しています。審査員資格を取得し、将来の活動の場を広げてみませんか？

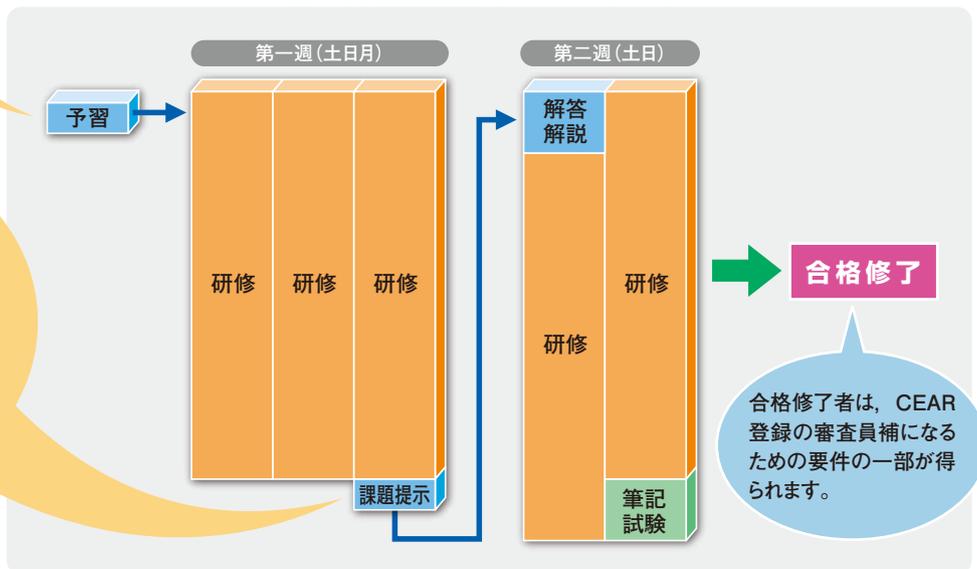


EMS審査員研修講座では、受講生に予習課題を与えていますので、研修前に必要な知識を身につけた上で臨むことができます。また研修では、**予習の結果をもとに、講師陣が一人一人の受講生のレベルにあわせた指導**を行います。

第1週目に学んだ内容をもとにした課題が提示されます。翌週最初の研修で課題の解答解説・復習を行います。

EMS審査員研修講座に、2週コースを新設しました。**土日及び3連休**を利用した、平日の受講が難しい方に**最適な**コースです。

EMS審査員研修講座（2週コース）の流れ※



### 法政大学環境センター EMS研修講座

〒102-8160  
東京都千代田区富士見 2-17-1  
富士見坂校舎3F  
電話：03 (3264) 5549  
FAX：03 (3264) 5545  
Email：emsinsa@ml.hosei.ac.jp

#### —開催日程—※

- 第1回：2009年8月18日(火)～8月22日(土) (5日間連続のコースです)
- 第2回：2009年11月21日(土)～11月23日(月), 2009年11月28日(土)～11月29日(日) (2週コースです)
- 第3回：2010年3月20日(土)～3月22日(月), 2010年3月27日(土)～3月28日(日) (2週コースです)

※講座の詳細はホームページ・パンフレットをご覧ください。

・本学学生が本講座を受講する場合、受講料割引が適用されます。環境センターまでご連絡下さい。

## 東アジア環境社会学国際シンポジウムの成果

東アジア環境社会学国際シンポジウム実行委員会委員長・社会学部教授  
船橋 晴俊

2008年10月4日（土曜）から6日（月曜）にかけて、法政大学多摩キャンパス百周年記念館国際会議場において、「東アジアの環境問題、環境運動、環境政策に関する国際シンポジウム」が、法政大学環境センターと環境社会学会の共催で開催されました。双方の協力で、東アジア環境社会学国際シンポジウム実行委員会を形成し、百周年記念館の諸設備をフルに使用し、社会学部および大学院社会学研究科・政策科学研究科の環境系ゼミの学生・院生諸君に係員として協力してもらう形で、準備に取り組みました。4日と5日は、午前と午後を通して、日英同時通訳付きの8つのセッションで計26本の報告を行い、6日はフィールドトリップとして川崎市エコタウンを訪れました。

参加者は、中国、韓国、台湾からの海外報告者15人を含む約200人に達しました。中国からは洪大用（人民大学）、施国慶（河海大学）、陳阿江（河海大学）、包智明（中央民族大学）の各氏を初め7人、韓国からは、李時載（カソリック大学）、具度完（カソリック大学）、朴在默（忠南大学）、金奎奎（高麗大学）の各氏ら7人、台湾からは王俊秀氏（国立精華大学）の参加を得ましたが、いずれも、それぞれの国の環境社会学を中心的に担っている方々です。4日と5日の昼休みには日本の環境問題の映像資料を上映し、5日の第8セッションの後には、総括的な討論を行いました。報告の詳細は、Proceedings（要旨集、A4判、335頁）に掲載されていますが、各国の環境問題の独自性ととも、実践的

にも学問的にも、さまざまな問題が共有されていることが確認されました。

このシンポジウムを通して、最も印象的だったことは、これら東アジア諸国・地域の環境社会学研究者が、日本の環境問題の歴史的経験と現状、そして、日本の環境社会学に寄せる関心の強さです。単に数日間のシンポジウムへの参加という形にとどまらず、大学院生の派遣や共同研究の企画など、さまざまなチャンネルでの相互交流の模索と推進への熱意が感じられました。国際シンポジウム実行委員会は、本学環境センター関連の諸資料、環境社会学会機関誌『環境社会学研究』のバックナンバー全号、環境社会学分野の図書約50点からなるギフトセットを各国に進呈しましたが、今後の学問的交流の一助となることでしょう。

また今回のシンポジウムでの意見交換を通して、東アジア四カ国・地域で、開催国持ち回りで、二年に一回ずつ国際シンポジウムを組織化しようという合意がなされたので、今回のシンポジウムは、東アジアにおける環境社会学研究の国際的組織化・制度化の画期となったと言えますし、また世界的な環境社会学の今後の研究動向にも影響を与えるだろうと思われまふ。本学における環境問題、環境政策の研究の展開にとっても重要な意義を持つものであったと言えます。なお、本シンポジウムのProceedings（要旨集）の入手については、環境センターあるいは、社会学部船橋研究室にお問い合わせ下さい。



# 生物多様性を育む 多摩キャンパスの森

～里山実態調査と里山活動の紹介～

生物多様性の保全については、2010年に国連の「国際生物多様性年」を迎えることから、国内においても注目が集まっている問題です。

また、生物の多様性を育む自然環境は、熱帯雨林、森林、湿地、田んぼなどさまざまな場所にあります。今回、身近な生物多様性の保全に向けた取り組みとして、多摩キャンパスにおける里山の実態調査と里山活動について取り上げてみました。

## 多摩環境委員会による里山実態調査がスタート！

多摩キャンパスは約824,000m<sup>2</sup>の広大な校地面積を有し、その内の約461,510m<sup>2</sup>（校地面積の約56%）が保存緑地となっています。一般的に樹木は二酸化炭素の吸収源とされていますが、その種類や状態によっては、かえって二酸化炭素の排出源になってしまうという指摘もあります。調査は、多摩キャンパスの広大な緑地の現状を把握し、今後の多摩キャンパスの環境保全活動、環境教育・啓発活動に役立てていくことを目的としています。

調査は、2008年10月から12月にかけて、委託業者の(有)サトウ草木代表の佐藤好延氏を中心に、森林総合研究所の専門家にもご協力いただきながら、調査活動を実施しました。

今回の主な調査項目は、樹種、胸高での幹周囲長、樹高、

地形情報（斜面方位、傾斜度など）、林床植物の概況などです。今回の調査により、多摩キャンパスの森林にはタケ類も含めて32種の樹木が現存し、そのうち26種が落葉広葉樹であること、樹種として最も個体数が多いのはコナラで全体のおよそ4分の1を占めていること、したがって、多摩キャンパスの森林はコナラを優占種とする典型的な二次林であり、いわゆる「里山」の景観をそなえた森林だといえることなどが、科学的な実測にもとづいて明らかになりました。

2009年度は、炭素の吸収・蓄積・循環機能を詳細に明らかにするとともに、低木や草木や土壌の実態、保水効果、動植物の生息状況、防災効果などを、科学的により深く解明できるよう、引き続き調査を進める予定です。

## 多摩キャンパスにおける里山活動（環境系総合サークルH.E.L.P!の取り組み）

経済学部経済学科 二年 杉原 啓介, 経済学部現代ビジネス学科 二年 半田 拓矢,

経済学部国際経済学科 三年 浜田 恒太郎

私たち環境系総合サークルH.E.L.P!は、2006年3月より法政大学多摩キャンパスにおいて里山活動を行っています。里山とは、人里と山の間にある人が手を加える事によって色々な恩恵を得ることができ、また自然と人間が共生している場所をさします。しかし、現在、里山はどんどん荒廃してきています。本来、里山には燃料となる木材などのバイオマスエネルギーや水源の確保、生物の多様性の維持、水害や土砂崩れの防止などの機能があります。しかし、時代とともに里山の必要性が失われてしまい管理されなくなり、竹の繁殖による竹林化や粗大ゴミが不法投棄されているなど問題が起きています。里山を活用するには、人が適切に管理する必要があります。

多摩キャンパスは東京ディズニーランド1つ分の広大な敷地面積があり、その多くは里山です。しかし、実際、学生がその里山の存在を意識する機会はほとんどありません。私たちの里山活動は、これだけ広大な里山があるのに非常にもったいないことだと思い、人間と密接に関わる里山を少しでも知ろう、また里山の手入れにも協力できることは協力しよう、という思いから始めました。まだ活動を始めてから日が浅いため、思いついた活動は何でもやってみて、よい活動は今後も継続して行えたらと考えています。これまでの活動内容としては、下草刈り、ハイキングコース巡り、里山の資源を活用した工作、他団体との交流などがあります。

里山の環境保全としては、下草刈りを行いました。地面に笹などの下草が生い茂ってしまうと、地表に光が届かず他の植物の発育に悪影響を及ぼしてしまいます。

サークル員はまず簡単に鎌の使い方を習い、その後社会学部棟裏を中心に下草を刈り取りました。

下草はまたすぐに生えてしまうので、この活動は出来るだけ定期的に行えたらと思っています。

ハイキングコース巡りは、キャンパス内にある隠れた歴史

をもっと知ろうと思い、行いました。ポツダム宣言を世界に伝えた「多摩送信所跡」やハイキングコースの奥にある「山王社」などを巡り、多摩キャンパスにある歴史について学びました。

2008年度、最も盛んに行った活動が工作です。里山に豊富にある資源を使って楽しめる活動をしようと思い、竹とんぼや箸、写真立て、リースなどを作りました。このうち竹とんぼと箸作りは、多摩キャンパスの地元である相原地区で行われたお祭り「相原フェスティバル」に参加した際に「竹を使った工作」としてブース出店に活用し、来場した子供達に工作を楽しんでもらいました。また、このお祭りをきっかけに、他団体との交流も生まれました。大戸地区の緑地で雑木林やハイキングコースの手入れを行っている団体の活動に参加させてもらい、貴重な話などもたくさん聞くことが出来ました。今後も定期的に参加していきたいと考えています。

今後の展望としては、サークル員としてもより里山に関するノウハウを楽しみながら学び、多摩キャンパスに通う他の学生にももっと里山について知ってもらえる機会を設けられればいいと考えています。



相原フェスティバルに参加

### 環境系総合サークルH.E.L.P!のメンバーが制作した竹細工の数々



竹箸

子供たちが箸づくりを体験!



竹鉄砲

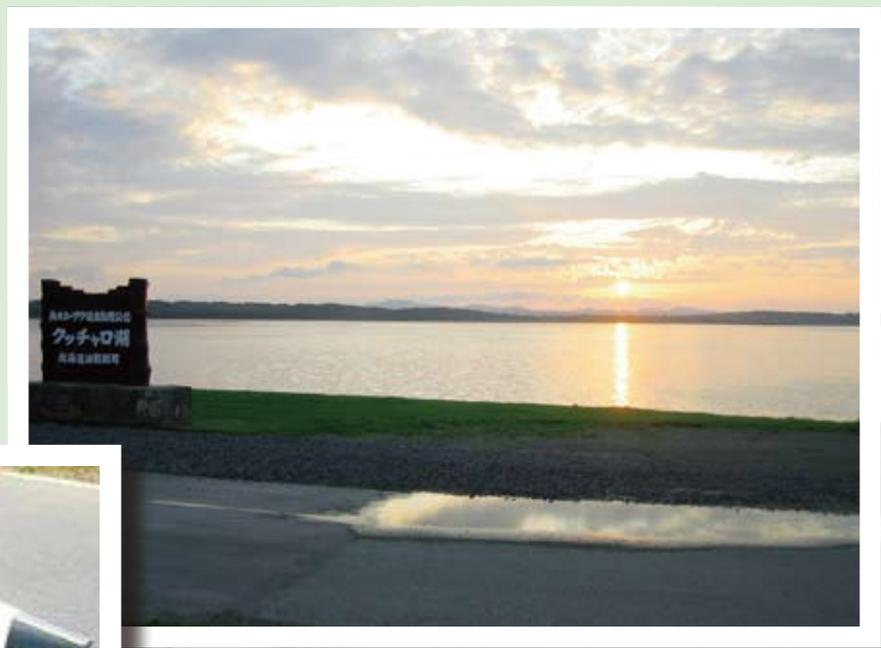
作るのに苦戦しましたが、なんとか形にすることができました。



竹トンボ



木製遊具「お豆」



「学生環境サミット」の舞台となったクッチャロ湖の夕日



「カーボンモノコックエコランカー」

# 3

## 学生の環境改善活動

## TOKYO NEXT DESIGN PROJECT 『人と森をつなぐプロダクト』

法政大学工学部システムデザイン学科 4年  
人間・社会環境デザイン研究室

金田 遼平 松本 美沙恵

協賛・東京都、森のいいこと

### 序文

初めに、本プロジェクトは東京都の主催する中小企業と大学生との商品開発プロジェクトである“TOKYO NEXT DESIGN PROJECT”による、株式会社 森のいいことと人間・社会環境デザイン研究室との産学連携プロジェクトです。

都会のイメージが強い東京ですが、実はその4割近くを森林が占めています。しかし、それを実感する機会は非常に少なく、東京に住む人と森の距離は近いようで遠いのが現実です。そこで、まず第一歩として 人々に森に対する関心を持たせる＝人と森をつなぐ ことが重要であると考えました。人と森をつなぐ新たなプロダクトを提案することで、これからの人と森の関係へのきっかけを生み出します。

テーマである“人と森をつなぐ”を基に、「森に触れる」「森を感じる」「森を守り、人を守る」の3点をコンセプトに挙げ、(1)笛(2)遊具の2つのプロダクトを制作しました。制作後、発表の場として、2008年12月に行なわれたエコプロダクツ展に於いて展示を行い、様々な年齢層・業界の方々の貴重な評価を頂きました。

現在、両製品共に製品化へ向け調査・推敲を繰り返しており、今後は小売りだけでなく、教育機関や施設など、様々な媒体での提案を企画しています。

### 森を守り、人を守る笛

日常生活の中で森に触れられ、森を感じることが出来る為に、いつも身に付けられるものを中心に考えました。その中でもコンセプトに最も近い、ストーリー性を持たせるものとして「笛」を選びました。

持ち歩けるサイズにすることで常に“笛=森”を身に付けられ、生活の中に森を意識させます。笛は災害時にはその音色によって命を助けるきっかけとなり、人を守ります。間伐材を用い、売上の一部を林業活動に還元することで、この笛を持つことが森を守ることにつながり、さらに守られた森は再生し、人を守り、人と森の関係の重要性を啓発します。



### coin

普段から身に付け易い様、一見笛に見えないモノを目指した。ネックレスタイプ。鳴らし方は、笛ラムネや薬缶の機構を参考にした。



### block

文字等を入れることが出来、タグとしての利用が可能。キーホルダータイプ。



### kine

2つの木の組み合わせによって、木質や音色の変化が生まれる。キーホルダータイプ。

### 人と森をつなぐ新たな木製遊具

住環境や遊びの変化から子どもたちが木に触れる機会が減っている今、幼い頃から木に触れ、感じることで、その温もりの記憶を永く残したい。受け身ではなく、思わず子供たちが触れたいものを目指し、積極的な関心を持たせます。遊びの中で森を意識でき、子供の発想力を促すもの。森に触れ、遊んだ記憶を未来へとつなぎ、東京の森や自然に対する意識を持つきっかけとなるものを目指しました。



### ピーナッツ

大きさを異なる穴があいており、中にパーツを入れるとコロコロと音が鳴る。そして、中をのぞき、取り出し方を考えることで様々な発見が出来る。



### ざぶとん

表面の穴にパーツをさすことで表情が変わり、裏返すとゆらゆら揺れる。一人から数人まで乗って遊ぶことが可能。



### お豆

抱える・またがる・転がす等の遊びによりバランスを楽しむ。非対称な前後の膨らみにより、抱えた感覚に違いがあり、木の温もりや香り全身で体感出来る。

## ドスツとくる自然は目の当たりから —CASE1から見える人間環境学部という光景—

人間環境学部人間環境学科 2年

村瀬 憲太郎

「CASE1」と称して行われた第一回学生環境サミットは、5つの大学の学生で構成された計20名の学生実行委員と、社会人実行委員、ほか沢山の後援団体、協賛企業によって実現された環境イベントです。

その第一回開催地は北海道浜頓別町・クッチャロ湖、開催日程を2008年9月1日～8日、開催目的を「この地における自然保護と活用、それに伴う地域復興」として運営がスタートしました。

法政大学人間環境学部からも、村瀬憲太郎が副実行委員長として、大越彩子・大塚由芙の2名が実行委員として運営の段階から携わり、更に長瀬智也・和田奈々恵の2名が一参加者として共に浜頓別町を訪れました。

また社会人アドバイザーとして、法政大学大学院環境マネジメント研究科・鶴田佳史客員准教授にも現地にて講演・学生へのアドバイスを頂きました。

CASE1開催中、全国から浜頓別町に集まった約80名の学生は、10グループに分かれ一週間共にクッチャロ湖畔でキャンプ生活をし、その間に自然体験・町民との交流を通してテーマ解決に向けた課題の抽出、最終的に町民に向けた「浜頓別の自然保護と活用」へのアプローチプランをプレゼンテーションしました。

メディアによるあらゆる情報の提供から隔離された、独特の生活環境の下で、文系理系、専門分野、これらの垣根を越えた私たち学生は、今までの人生で培ってきた経験や、勿論大学における講義や活動から得た知識や知恵、信念を、可能な限り振り絞り、出会ったばかりの仲間たちと伝え合いなが

ら1つ1つのアプローチを創造しました。

そして、その中の幾つかは、CASE1参加者一部有志によって、現在進行形にて実現が遂行されています。サミット開催中に存在した地域との温かな繋がりや自然への感動が有志の熱となり、CASE1は単なる地域への啓蒙活動に終わらず、地域への若い力の介入をもってエネルギーを浜頓別町に残しています。

一方で第二回開催に向けて、学生実行委員は代替わりをしながらすでに活動を始めています。より一層の学生主導の活動を目指すべく、開催候補地の選出からアポ取り、社会人実行委員への企画書提出、現地調査に至るまで学生主導で行い、そのサポート・軌道修正を社会人の方々に行ってもらっています。

昨今、いわゆる地球温暖化を連想させる環境問題に対するメディアの支配力は拡大の一途を辿っております。現在のメディアの向かうベクトルを考えれば当然のことではあります。私たちが本来考えるべき環境問題とはそういうメディアから提供される恐怖などではなく、目の当たりにした環境への感動であったり、感情から生まれる信念なのではないでしょうか。このような、前提とされた環境問題ではなく、そのもっと奥にありうる根源のようなところを鷲掴みにする機会を、この学生環境サミットから私は頂いたと感じております。

この報告書への執筆が、より多くの本学部生を対外へと引き込む、弱々しくも瞬く発光源となれば幸いです。

またそれこそが人間環境学部で学ぶ所以であると強く信じます。



写真1. 山から見えるクッチャロ湖（自然体験（エコ・ツアー）の一環で森を散策。そこから見たクッチャロ湖は絶景の一言でした。）



写真2. キャンプ場にて学生集合写真（お別れ前にみんなで親しみ馴染んだクッチャロ湖畔キャンプ場にて記念撮影をしました。）



写真3. 町民へのプレゼンテーション（休憩中にも自分たちの班のプレートの前で、説明を交えながら参加者と交流しました。）

## カーボンモノコックエコランカーの制作について

工学部機械工学科 機械研究会 2年

土井 建志

我々が行っている活動はワールドエコムーブという電気自動車のレースでより良い成績を収めるために、より性能の良い電気自動車の研究・開発をする事です。

自動車とは言っても、小柄な人間1人がようやく乗れるといったものです。

何故そうするかと言えば、最大の目的は空気抵抗にあると言えます。空気抵抗を少しでも小さくするために、形状は流線型を用いてサイズは小型化します。

そこまで知識が無くてもそこそこの物はできます。しかし少しでも良い成績を収めようと思ったら多方面についての知識が必要になります。当然電気自動車な訳ですから電気の事にも精通していなければなりません。電気に関しても色々ありすぎるので割愛しますが、簡単に言えばどうすればバッテリーのエネルギーを効率よく使えるか、という事です。

それからもう1つこれがカーボンモノコックというテーマに大きく関わってくるのですが、まず車の基本骨格にあたる部分をシャーシと言います。シャーシには車輪が付き人が乗る訳です。ですから簡単に壊れたら困ります。当然材料を厚くしてやれば強くなりますがそれでは重くなってしまいます。バッテリーのエネルギーを大事に使いたいレースの世界ではマシンの重さというのは最大限省きたいものなのです。

そこで、構造でシャーシの強さを稼ごうという考え方をします。ダンボールを思い出して下さい。あれは紙な訳ですが波状に折られる事によりとても折れにくく強いですよ、あ

れこそがまさに構造の強さなのです。

ここでモノコックというものを説明します。モノは1つ、コックは構造、つまりシャーシを1つの構造物とする事で効率良く強度を上げるというのが狙いです。構造的に強ければその分材料を減らす事ができ、とても効率的と言えます。

最後にカーボンの説明ですが、カーボンとは最近流行りの炭素繊維の事を指します。

炭素が軽量である事は化学の周期表からも分かると思います…軽いのです。カーボンとは言ってもそれ単体で用いるのではなく、普通のプラスチックのように固まる樹脂と混ぜて使います。カーボンは、それ自体はあくまで繊維なので布のような物ですが（勿論布状に加工されて売られている）、樹脂を用いる事により成型する事ができます。しかも元は布なので形状の自由度は非常に高く、また繊維という性質から繊維方向に対する引っ張りに非常に強いという性質を持ちます。つまり軽くて強い素材な訳です。

これらの事をまとめて言うと、カーボンモノコックというのは、炭素繊維を用いた一体構造物という事になります。それこそが我々がレースでより良い成績を収めるために打ち出した1つのテーマな訳です。

見たこともない方に文章だけでこのような事を説明するのはとても困難でした。稚拙な文章ですが、少しでも理解して頂けたらと思います。



レース前の様子、中に自分が乗っています。



学祭の工学展の様子



レース場にて



まちあるきエコツアー  
「江戸城外堀の歴史と環境への取り組みについて」にて  
彩る紅葉に気づいて (撮影 安齋利晃)

# 4

## 地域との連携

## まちあるきエコツアー 「江戸城外堀の歴史と環境への取り組みについて」

新宿区地域文化部文化観光国際課学芸員

栩木 真

今回、法政大学環境センターからのご依頼で、まちあるきエコツアーの参加の皆さんと市ケ谷駅から紀之国坂まで実践しました。12月も半ばを過ぎやや寒い日でしたが、草木が葉を落とすこの時期は、外堀跡を見て回るには良い季節です。

最初は地下鉄南北線の市ケ谷駅構内の江戸歴史散策コーナーを見学し、江戸城外堀の全体像、石垣普請や堀普請の様子をお話ししました。展示コーナーの床には大きな「江戸切絵図」が描かれおり、これから巡るコースの確認をしました。皆さんからは絵図の屋敷が現在のどこか、お住まい場所が、江戸時代にはどんなところであったのか等のご質問がありました。ここでは、外堀周辺の街並みが、寛永13年(1636)江戸城外堀普請によって形づくられたことがお分かり頂けたと思います。

さて、いよいよ出発です。まず、市ケ谷フィッシュセンター入口に向かいました。この場所は、堀の中にあたり、市谷見附に繋がる橋詰の石垣が残っています。ここでの見どころは、石垣も然ることながら、橋詰が一種のダムとなっているため、飯田橋側に比べ四谷側のお濠の水面が4mも高いという点です。これは、市谷から飯田橋にかけての外堀が、神田川に繋がる谷を利用しているため、牛込見附、市谷見附、四谷見附の橋詰によってお濠の水量が調節されているわけです。

そこで、この辺りの地形を見るために市谷八幡神社に立ち寄りしました。今ではビルに遮られていますが、「江戸名所図会」にも紹介されている名所で、周囲を一望できる高台でした。参道の長い石段は、外堀通りとの高低差を実感させてくれ、江戸城外堀が武蔵野台地を刻む谷筋を巧みに利用していることが分かります。

次に外濠公園を抜けました。ここから紀之国坂にかけては、幕府が東国の大名に命じて台地を掘り下げ“外堀”を造った部分です。公園はお濠を埋めて作られていますが、四谷側、番町側とも急こう配の斜面となっており、最も深い部分では13m近く掘り下げられています。掘削工事は寛永13年3月からの5か月に延べ4万人が動員され完成します。

公園を出ると四谷見附です。江戸時代には、駅の南側を通る新宿通りは無く、道は釣の手状に折り回され、北側の四谷見附に繋がっていました。四谷は甲州街道、青梅街道に続く江戸城の西側の要衝で、薪や炭、青物等がここをって江戸市中に運ばれています。そして、玉川上水も四谷で外堀を渡

ります。見附の石垣は、明治時代に大部分が撤去されていますが、雙葉学園側には今もその一部が残っています。

さらに進んで、上智大学脇の土手を歩き紀之国坂へ向かいました。外濠の土手というと桜の名所ですが、江戸時代には、おもに松が植えられています。ここ真田濠の土手には震災、戦災をくぐり抜けた松の大木を見ることができます。真田濠も今では埋め立てられグラウンドとなっていますが、土手から見下ろすとかなりの高さがあります。この部分が全て江戸時代に人力により掘り下げられた範囲です。このように外堀普請では大量の土砂が掘り出されたわけですが、当日は、あまりこの点について触れませんでした。実は外堀を考える上で重要な点です。それは、掘り出された土の多くが谷の埋め立てに使われ、外堀周辺の市谷、四谷の街造りに大きな役割を果たしたということです。寛永13年外堀普請では、単に堀や石垣を築くだけでなく、同時に周辺の街造りも行われています。

土手を抜けると紀尾井町です。紀之国坂から続く土橋と交差する部分は、江戸時代には「喰違」と呼ばれています。外堀に設けられた出入口には見附と呼ばれる石垣の城門が築かれますが、「喰違」は唯一、土塁だけで築かれ、江戸初期の形態を残すものと考えられています。さらに喰違の土橋を中ほどまで進むと、南側に大きく眺望が開けます。緩やかにカーブして広がる水面は弁慶濠です。外堀はここで、赤坂の溜池から延びる谷へと接続します。高速道路の高架が少し残念ですが、大きな樹木も多く、見晴らしの良いこの場所は、外堀跡散策には外せないビューポイントです。

エコツアーは3時間と少しの間でしたが、実際にその場所を訪れることで、史跡江戸城外堀跡を再発見して頂けたのではないかと考えています。また、参加された皆さんの中には周辺に長くお住まいの方もあり、外堀に関わる幾つかのエピソードをうかがえたことは、私にとっても大きな収穫でした。ありがとうございました。



江戸歴史散歩コーナーにて外濠の歴史を学ぶ



四谷門にて石垣の構造について学ぶ

## 八王子市「斜面緑地保全」の取り組みについて

八王子市環境部環境保全課自然環境担当主査  
三宅 能彦

八王子市では、市街地にある丘陵地、特に斜面に残る緑地は、近年の宅地化などが進み、徐々に減少してきています。これまでもいろいろな手法により、その保全に取り組んできたところですが、十分な保全措置もなく、この貴重な「みどり」を守っていくことが非常に困難になってきました。これらの「みどり」は、わたくしたちの身近な生活圏内にあり、その自然の景観はわたくしたちの心を豊かにするだけでなく、それと深いかかわりを持つ動植物の生息・生育地となっています。また木々による大気中の二酸化炭素の吸収や水源涵養機能など、環境浄化作用を通して、日々わたくしたちの健康にも大きな影響を及ぼしています。

この残り少なくなっている「みどり」がこれ以上減少することのないよう、「みどり」の保全、適正な管理に努めることが急務と考え、かけがえのない貴重な「みどり」を次世代に渡り残していくため、新たなしくみづくりに取り組みました。その結果として、「市街地内丘陵地のみどりの保全に関する条例」を平成17年7月1日に施行しました。当時、この条例は、先進的な取り組みとしてNHKの全国ニュースで取り上げられ、各種団体からの多くの問い合わせなどをいただいたことを記憶しております。

この条例では、公募市民、学識経験者、事業者、弁護士などで構成される「八王子市斜面緑地保全委員会」を市が設置し、委員会には斜面緑地の保全に関するいくつかの重要な事項を審議していただいております。貴校の池田寛二教授には、当初である平成17年8月よりこの委員会の会長に就任していただき、保全区域の指定、緑地の保全基準、土地の買い取りなど、さまざまな内容の審議をお願いしております。また、委員会の運営にご尽力いただくとともに、委員会の礎を築いていただきました。あらためて感謝申し上げます。

おかげをもちまして、会長として池田教授がご在籍の4年間で、市内35ヶ所、面積34.6ヘクタール（平成21年3月31日現在）の斜面緑地保全区域を指定することができました。さらに平成20年度には、斜面緑地保全区域内の「みどり」の質を高めていくため、保全のしくみづくりについて検討を進め、土地所有者、NPOなどの保全団体、八王子市の三者により、管理協定を締結することができました。今年度からは、保全のための管理を進めていくことになっております。まだまだ試行錯誤により進めなければならない点が多い状況ですが、民有の「みどり」を管理するしくみを構築でき

たことは、大きな前進ではないかと自負しております。

八王子市は、21の大学が立地しております。その中でも貴校におかれましては、「ISO14001」の認証取得や「環境報告書」の作成など、環境に関し先進的に取り組みをされていると認識しております。また貴校の多摩キャンパスでは、多摩丘陵の豊かなみどりを活用し、自然環境や景観の保全、生物多様性の保持など、大学の研究機能を活かした里山整備などについて取り組みをはじめておられ、今後、地域への貢献も含め大きな期待を寄せております。わたくしどもも微力ながらお役に立てることがございましたら、協力をさせていただければと考えておりますので、今後ともよろしくお願ひ申し上げます。



「緑町緑地」  
平成17年度「八王子みどり市民債」により公有化した緑町緑地



「八王子堀之内里山保全地域」  
東京都が平成21年3月に指定した「八王子堀之内里山保全地域」



「根付緑地」  
旧斜面緑地保全区域の根付緑地。土地所有者の相続により、平成19年度に公有化した



越谷レイクタウンのまちびらきイベントにて風の力で動く「アクセスディンギー」が活躍

# 5

## 卒業生・諸機関・ 他大学・NGOなどの活動

## 越谷レイクタウン まちづくりと自然環境の取り組み

越谷レイクタウンふるさとプロジェクト副代表  
桜井 龍雄

越谷レイクタウンふるさとプロジェクト（通称「ふるプロ」）が活動している地域、越谷市は、平坦な地に主な用水路を含め十一の河川が流れています。この地は、度々洪水等の災害にみまわれ、治水との戦いの歴史でした。反面豊かな自然環境に恵まれた地でもあります。越谷市は、都心から22kmのベッドタウンとして、水田の宅地化が急速に進みました。抜本的な河川調節地の整備が急務となり、国の新規施策としてレイクタウン整備事業がスタートしました。

越谷レイクタウンは、計画面積225.6ha（東京ドーム約50個分）、湖面積は上野不忍池の約三倍を有し、計画人口22,400人の親水文化創造都市です。まちづくりの造成段階より、開発を進める都市機構、埼玉県、越谷市との会議を通して、地域住民、自然環境団体、地域有識者等で構成された「水と緑の懇談会」として、将来に伝承され得るまちづくりを目指して取組んで来ました。

私は、「水と緑の懇談会」のメンバーと共に事例視察、勉強会に参加しました。市民のコミュニティ形成の方策や次世代の子供達に夢のあるふるさと創生活動を経て、懇談会の任期も終わりました。そこで、事業が進む中、懇談会有志で提案して来たノウハウを実践する為に、「ふるプロ」を設立しました。

「ふるプロ」では、市民に活動成果を発表し、「公園的利用ゾーン」、「人と自然が触れあえるビオトープゾーン」、「サンクチュアリのビオトープゾーン」、「水郷越谷の再現ゾーン」といったゾーンによるまちづくりを提案しました。新しいまちづくりは、開発による越谷の水湿地に自生や生息していた自然との関わり、生態系への影響、環境モニタリングの実施や、出来るかぎり将来にわたって再生、復元し、住民の新しいライフワーク活動が出来る場を広げ発信していくものです。

2008年4月にJR武蔵野線に新駅も誕生し、商業施設地域には日本最大級のショッピングモールが開設されました。越谷レイクタウンには、電柱の地下埋設やレイクタウン内マンションへの太陽熱ソーラーシステムの導入等、エコに重点をおいた、新しいライフスタイルの街が誕生しました。

「ふるプロ」の最近の主な取り組みは、①まちびらきイベントでの「浮島づくり」、「小型ヨット（アクセスディンギー）の体験会」、「越谷自然環境今昔のパネル展」の実施、②レイクを中心に行うエコ活動（清掃、水中のガマの駆除）、

③自然観察会の実施、④越谷青年会議所主催フォーラムへのパネラー参加、⑤NHKふれあいミーティングへの参加、⑥講演会「水と環境、諸外国と日本」の主催、⑦「環境まちづくりフォーラムへの参加」が挙げられます。

また、「ふるプロ」には、メンバーに教師OBや現役教師が参加しています。市内の学校や大学（文教大学、獨協大学、埼玉県立大学）の教授、学生の協力による学際的討議を通し、地域の学校、学生との関わりや三世代交流の道が少しは進んでいると考えています。

母校法政大学がグリーン・ユニバーシティの実現に向けて、活動を展開されている事、大変参考になっております。環境センターの活動やデザイン工学部森田喬教授&ゼミの学生諸君の研究は大変興味深く、学生時代を彷彿する感を強くしました。深く感謝します。

これからも越谷レイクタウンを実践的活動の場として、後輩の学生に活動が根付き、活動の場を提供出来るようにと思っております。



まちびらきイベントで制作した「浮島」



レイク交流会にて

## 「森林公園」と「グリーン・ユニバーシティ」 —法政大学を訪ねた印象—

中国・中央民族大学教授

包 智明

2008年10月、環境社会学会主催の東アジア環境社会学国際シンポジウムに出席するために、初めて多摩キャンパスを訪れました。夕方に百周年記念館に着き、宿泊したその翌朝に見たキャンパスは印象的でした。朝早く起きて散歩したのですが、まるで「森林公園」を歩いているようで、とても大学のキャンパスとは思えませんでした。森の中に埋もれた建物は、近づかないと気がつかないほどです。しかしまた、自然の美しさ、豊かさ、自然と現代建築物との調和は、法政大学ばかりではなく、私がかつて客員研究員や専任教員を務めた立正大学の熊谷キャンパス、名古屋商科大学の日進キャンパスも同じでした。私の限られた経験からも、日本の大学が自然の重要さを認識し、キャンパスを緑豊かに造り、その森林を保存しようとする努力を強く感じます。

その点で、中国の大学は大きく違います。私の勤める中央民族大学もそうですが、中国の多くの大学は、日本の都心部の大学と同じ様に、キャンパスの中は高層ビルが並び、狭い空き地に人工的に植林した「森」が逆に高層ビルに埋もれ、とても自然を感じさせるものではありません。キャンパスを郊外に移転した場合でも、同じく高層ビル建築の繰り返しでした。しかし、例外もない訳ではありません。北京大学がその一例です。北京大学の今のキャンパスは元燕京大学のものです。アメリカの建築家H.K.Murphyが設計した森、湖、築山、庭園などから成る「園林」キャンパスです。景観を保護するため、政府から建物の高さを制限されています。建物が高い森に埋もれた景色は多摩キャンパスとよく似ています。

法政大学は「グリーン・ユニバーシティ」の実現に向けて、1999年から環境マネジメント・システムの国際標準規格（ISO14001）の認証を取得し、2004年度には市ヶ谷キャンパスから多摩キャンパスへと認証範囲を拡大した、と伺いました。調べてみると、日本の大学はISO14001認証の取得に熱心で、すでに認証を取得した大学も少なくありません。ところが中国では、ISO14001の認証は大学と無関係で、企業関連の認証であるとの強い見方があります。企業はともかく、私の知っている限りでは、この認証を取得した大学は一つもありません。いや、取得しようという動きもないのです。この点で、法政大学を含めた日本の大学の方が遙かに進んでいるといえます。

私にとって、多摩キャンパスは今回が初めてですが、法政

大学の先生たちとは長年の交流があります。私の知っている限りでは、日本において法政大学は環境教育・研究に最も力を入れている大学の一つであると思います。私の研究分野である環境社会学に限っても、法政大学は研究者が多く、今回のシンポジウムのように環境社会学の学術活動に多くの貢献を重ねてこられました。このように、長期の視野で環境問題に積極的に取り組んできた法政大学から、中国の大学が学ぶものは非常に多くあります。私個人も研究者として、日本との交流を重ねて、法政大学および日本の大学の成功した経験を中国に紹介し、それを中国の大学で生かしたいと思っています。



高層ビルがそびえた中央民族大学の一角



北京大学の一角



北京大学の未名湖の一角



# 6

## 資料編

# 本学の環境への取り組みと大学のISO14001認証取得状況（2008年度）

年月	環境改善活動	環境教育・研究		関連写真	大学のISO14001取得状況
		市ヶ谷	多摩		
2008年 4月		千代田区協働事業CES研究ゼミ（1～） 屋上緑化維持管理プロジェクト（8, 11）			金沢大学技術支援センター
5月	第一回 環境保全委員会（16）	屋上緑化維持管理プロジェクト（7, 30） サツマイモプロジェクト（21, 26-28） グリーン購入ガイドブック公開（20） 新市区エコ事業者連絡会（23） 第一回 市ヶ谷環境委員会（23）	第一回 多摩環境委員会（20） 第二回 多摩環境委員会（24）		
6月	省エネポスター掲示【夏季】（1～9/30） 省エネニュース配信（Vol.1）（4） グリーン購入ガイドブック公開（20） 第一回 CO <sub>2</sub> 削減/ライトダウンキャンペーン参加（21） 第三回更新審査受審（JSA審査登録事業部）（24, 25）	サツマイモプロジェクト（6, 18, 23） 「新宿みどりのカーテン」プロジェクト（10） エコツアー①：落合水再生センター【新宿区】（11） 「法政大学環境報告2007-08」発行（13） 第三回更新審査受審（24, 25） 屋上緑化維持管理プロジェクト（25）	ホテル飛翔の確認、紹介（3） H.E.L.P!【環境系総合サークル】エコキャップ活動協力（16～） 第三回更新審査受審（24, 25）		
7月	省エネニュース配信（Vol.2-8）（2・14・16・18・23・25・31） 第二回 CO <sub>2</sub> 削減/ライトダウンキャンペーン参加（7） 第一回 エネルギー・温暖化対策小委員会（11） 打ち水大作戦開催【多摩】（28）・【市ヶ谷・小金井】（29） 第一回 グリーン購入小委員会（31） 第二回 環境保全委員会（18）	エコツアー②：東京ガス「水素ステーション」・「暮・楽・創ハウス」（1） サツマイモプロジェクト（8・11・24） 第二回 市ヶ谷環境委員会（25）	たまeco【多摩学生環境委員会】「環境会議」参加（2） マネジメントプログラム承認確認（24） 多摩キャンパス森林実態調査（29～）		
8月	省エネニュース配信（Vol.9）（5）	EMS審査員研修講座（5-9） 私立大学環境保全協議会 夏期研修・研究会【福岡工業大学】（6-8） エコツアー③：谷津干潟自然観察センター（20）	私立大学環境保全協議会 夏期研修・研究会【福岡工業大学】（6-7）		
9月		内部監査員養成講座（3-4） サツマイモプロジェクト（9, 12）	公開授業【環境経済論B】（23-30） 公開授業【環境問題B】（23-10/7） 公開授業【自然環境論B】（23-10/7） 学外エコツアー：三凌商事愛川リサイクルセンター（27）		
10月	第一回 資源・リサイクル小委員会（2） 第二回 エネルギー・温暖化対策小委員会（20） 省エネニュース配信（Vol.10）（20） 「第9回環境展」出展（20-24） ①エコバックの制作、講演会参加者への配布 ②エコ文具の展示【コクヨ】 ③環境配慮型スポーツ用品の展示【ASICS】 ④ペットボトル、発泡スチロール、缶の中間処理工程のパネル展示と中間処理過程の実物展示【広陽サービス】 ⑤図書館リユース・ボックス ⑥その他、パネル展示 第二回 グリーン購入小委員会（30） 第三回 環境保全委員会（20）	サツマイモプロジェクト（7・15・29） 第33回「法政大学大学院まちづくりと都市政策セミナー」主催：法政大学大学院（18-12/13） 「第9回環境展」開催（20-24） 講演会「セブンイレブンの環境に関する取り組み」（23） 第三回 市ヶ谷環境委員会（24）	「東アジアの環境問題、環境運動、環境政策に関する環境社会学国際シンポジウム」開催（4-6） 経済学部環境分野6セミナール合同報告会（27） 第三回 多摩環境委員会（14）		学校法人 嘉数学園 沖繩大学
11月	環境NEWS配信（Vol.1, 2）（11, 28） 省エネポスター掲示【冬季】（15～3/14） 第二回 資源・リサイクル小委員会（28） 環境改善活動推進キャラクターが「えこびょん」に決定（11月下旬）	サツマイモプロジェクト（18） EMS審査員研修講座（25-29）	たまeco「環境会議」参加（20）		学校法人 成蹊学園
12月	省資源推進の啓発ポスターの掲示（1） 環境NEWS配信（Vol.3）（19） 省エネニュース配信（Vol.11）（19） 2008年度コピー・リソ・OA用紙目標値、使用量公開【2008年4～11月】、パフォーマンスチェック票提出依頼【第一、二期】（24） 第一回 地球環境委員会（18）	サツマイモプロジェクト（3, 10） エコツアー④：市ヶ谷キャンパスエコツアー（5） エコプロダクツ2008における多摩学生サークルH.E.L.P! プース見学（11-12） エコツアー⑤：江戸城外堀まちあるきエコツアー（20） 第一回 地球環境委員会（18）	環境系ゼミナール合同報告会（14, 20） 学内エコツアー：汚水処理場・ごみ庫（16） 第一回 地球環境委員会（18）		
2009年 1月	第三回 エネルギー・温暖化対策小委員会（15） 環境NEWS配信（Vol.4）（19） 環境保全委員会・小委員会HP公開（26） コピー・リソ・OA用紙使用量公開【2008年12月】、パフォーマンスチェック票提出依頼【第三期】（27） 第四回 環境保全委員会（15）	サツマイモプロジェクト（19） 新市区エコ事業者連絡会（26） 第四回 市ヶ谷環境委員会（22）	多摩環境展（16～2/16） 法政中高における環境教育支援【特別講義】（20, 28） 第四回 多摩環境委員会（9）		
2月	環境NEWS配信（Vol.5）（6） 第三回 グリーン購入小委員会（23）	市ヶ谷CESゼミ4回シンポジウム「89万人でえがく新しい千代田 ～他人事から自分事へ」（13） 「欧米のサステナビリティ教育に関する調査報告会」：第一回サステナビリティ教育研究小委員会（24）			
3月	省エネニュース配信（Vol.12）（16） 第三回 資源・リサイクル小委員会（18） 「快適厨房コンテスト2008」で愛情食堂賞受賞（25） 環境NEWS配信（Vol.6）（26） ISO運用管理アンケート公開（27） 第四回 エネルギー・温暖化対策小委員会（30） 第五回 環境保全委員会（30）	私立大学環境保全協議会第25回総会・研修研究会【法政大学】（9-10） 新市区エコ事業者連絡会・グランプリコンテストでチャレンジ賞受賞（14） 「リベラルアーツを考えるー社会的共通資本としての教育ー」：第二回サステナビリティ教育研究小委員会（16） EMS審査員研修講座（17-21）	私立大学環境保全協議会第25回総会・研修研究会【法政大学】（9-10） H.E.L.P!たまeco シイタケ栽培：菌植えつけの協力（26）		

\*2007年度以前の取り組みについては、過去に発行した環境報告書を参照して下さい。

# 教育研究組織の整備状況及び環境負荷データ（2006年－2008年度）

## 教育研究組織の整備状況

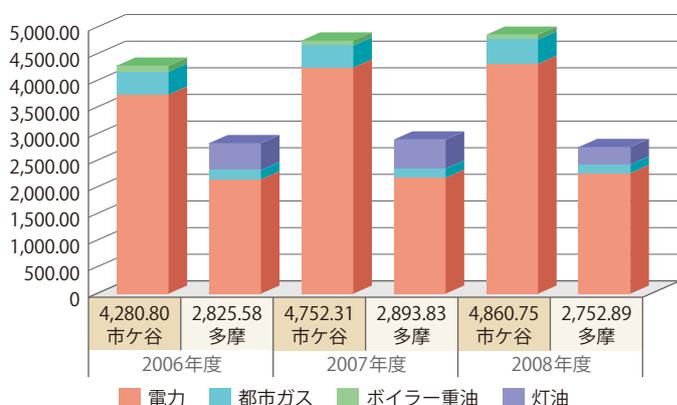
- 2006 大学院人文科学研究科国際文化専攻を改組、国際文化研究科国際文化専攻修士、博士後期課程設置、人文科学研究科心理学専攻修士・博士後期課程設置、IGIS（グローバル学際研究インスティテュート）開講
- 2007 デザイン工学部建築学科、都市環境デザイン工学科、システムデザイン学科設置
- 2008 グローバル教養学部グローバル教養学科設置、大学院政策創造研究科政策創造専攻修士・博士後期課程設置

## 校地の整備状況

- 2006 富士見坂校舎使用開始、新一口坂校舎竣工
- 2007 外濠校舎竣工
- 2008 市ケ谷田町校舎竣工

## 環境負荷データとコメント

### 1. エネルギー使用量と内訳（kL）（原油換算）（注1）



#### コメント

- 2008年度は、市ケ谷、多摩共に目標を達成しました。
- エネルギー需要期（夏・冬）に向けた活動（省エネポスター配布、省エネニュース配信、打ち水等）を積極的に実施しました。特に、省エネニュースは12回配信することができました。
- 施設面では、市ケ谷田町校舎の使用開始、市ケ谷総合体育館の空調工事完了、賃貸ビル用途変更等があり、エネルギー使用量に影響を与えました。

注1）＊「エネルギーの使用の合理化に関する法律」の改正（2006年4月1日施行）に伴う、熱と電気の区分の廃止、熱電一体管理化に基づき、2007年度から数量単位を従来のMJから原油換算値（kL）に変更しました。  
 ＊2006年度のエネルギー使用量及び内訳のデータに関しては、2007年度に市ケ谷キャンパスデータにて使用した換算係数を適用して算出しました。

### 2. コピー・リソ・OA用紙使用量（枚）



#### コメント

- 2008年度は、多摩は目標を達成しました。一方、市ケ谷は目標を達成することができませんでした。
- 学生対応部局で使用量が増加する傾向にありました。
- 2008年度は、資源・リサイクル小委員会にてポスター配布、両面コピーの推進を行いました。

### 3. 一般廃棄物排出量（t）



#### コメント

- 2008年度は、市ケ谷、多摩共に目標を達成することができませんでした。
- 一般廃棄物が増加した要因としては、入学増、新学部設置のための改修工事および事務室移転の増加等が挙げられます。

\*教育研究組織、校地の整備状況、環境負荷データの掲載範囲は、環境マネジメントシステムの構築が完了している市ケ谷、多摩キャンパスを対象としています。また、データは、2009年5月1日現在のものです。  
 ＊2005年度以前のデータについては、過去に発行した環境報告書を参照して下さい。

## 第三者意見（日本大学商学部教授 村井 秀樹氏）

### 社会的使命と説明責任

大学は、研究・教育を司る機関です。現在、少子化による「大学の経営危機」がしばしばマスコミで取り上げられています。それでは、「大学の生き残り戦略」とは何でしょうか。奇抜な校舎を建て、新学部を創設し、一人でも多くの学生を集めることなののでしょうか。今日、「生き残り戦略」という言葉が独り歩きしているように思われます。大学も社会、国家、地球上の一部であり、単独で運営されているわけではありません。大学はその社会・国家の中で生かされ、運営されていることを再認識すべきです。自然界でも単体で生き残ることは不可能です。絶滅危惧種にならないために、共存共栄の道を探るべきだと思います。ここに、大学は社会に対して自らの活動を説明する責任（accountability）があります。

### 10年間の“地に足がついた”歩み

法政大学は、1999年に人間環境学部を創設しました。同年に「環境憲章」を制定し、総合大学では、わが国初のISO14001を取得しました。現在では、雨水利用や人感センサーの設置、屋上緑化をしております。里山活動（多摩キャンパスで実施）までも行っている大学は珍しいと思います。特に、法政大学の屋上緑化は、レイアウト、品種等に関して学生からの意見を大学の方針に反映させた珍しい事例です。法政大学はこの10年間試行錯誤を繰り返しながら、温暖化防止ならびに憩いの場の提供により、学生ならびに地域住民との共存を目指してきました。手段と目的を混同することなくISO14001を取得し、本来の目的である学生の環境面での意識改革や地域住民とのコミュニケーションを図っています。

### 3つの課題と今後の方向性

法政大学は、今後の実施計画を「グリーン・キャンパス創造計画」として打ち出し、環境目標、環境マネジメント

プログラム、実施部局を整理しています。その推進体制と責任の所在を明確にしている点は、他大学には見られないほど充実しています。そこで、以下の3つの課題を指摘させていただきます。①法政大学の「環境報告書」は、企業のCSR報告書のように第三者検証を受けたものではなく、むしろ大学の研究・教育の成果を発表する広報誌のような役割に留まっています。第三者検証を導入することによって、さらに環境負荷データに信頼性が増します。社会的に受け入れられる報告書を作成する努力も必要であると思います。②環境問題への取り組みに関しては、最初は大きな環境負荷低減ができますが、徐々にその低減率が小さくなりがちです。そこでモチベーションを維持するために様々な施策が行われますが、それを単発で終わらせないような仕組みを構築する必要があります。そのためには、教職員や学生への啓発活動の浸透が不可欠です。③2010年度から新たに3カ年計画を立てる予定のようですが、中・長期のビジョンを是非とも示してもらいたいものです。これこそが、大学の社会的責任であると確信しております。

今後も環境リーディング大学としての法政大学を期待しております。

#### 村井 秀樹（むらい ひでき）

##### ■ 略歴

1992年3月 日本大学大学院商学研究科博士後期課程 満期退学  
1996年3月～1998年3月 カナダ・ウォータールー大学 (University of Waterloo) 客員研究員  
2004年10月 日本大学商学部教授  
2006年9月 ポーランド・ウッジ大学招聘教授



##### ■ 現在

日本大学商学部教授  
環境省 国内排出量取引制度検討委員会  
社海外環境協力センター カーボン・オフセットフォーラム アドバイザー

##### ■ 研究テーマ

温室効果ガス排出権取引の経営・会計問題

#### 編集後記

今回の報告書は、わかりやすく、より深い情報をお伝えするために、企画・編集段階で以下の三つの試みを取り入れました。

一点目は、国内でも注目が集まっている「生物多様性の保全」をテーマに、多摩キャンパスにおける里山実態調査と里山活動を紹介しました。二点目は、環境への取り組みの経緯、環境負荷データは、報告書の対象年度を中心に掲載し、できる限り視覚化しました。三点目は、環境問題の解決には技術的なアプローチも必要不可欠であるため、理系分野の環境教育・研究、学生の環境改善活動をより多く紹介しました。

2008年度は、市ヶ谷キャンパスの緑化の取り組みが「新宿エコワン・グランプリコンテスト」で「チャレンジ賞」、小金井キャンパス東館食堂が「快適厨房コンテスト」で「愛情食堂賞」を受賞するなど、本学の環境への取り組みが高い評価を受けました。今後は、環境改善活動推進キャラクター「えこびよん」を活用して、環境への取り組みを積極的に推進していきたいと考えております。

報告書の作成にご協力いただいた皆様には心より御礼申し上げます。本報告書をきっかけに本学の環境への取り組みに関心をもっていただけたら幸いです。

最後まで読んでくれて  
どうもありがとう。



#### 投稿のお願い

法政大学環境センターでは、本学に関連した環境貢献活動について『環境報告』で紹介したいと考えています。投稿を希望される方は、1200字程度の原稿（写真含む）、お名前、所属と役職、連絡先を明記して以下のアドレスにお送り下さい。採否につきましてはご連絡致します。

送付先: [cei@hosei.ac.jp](mailto:cei@hosei.ac.jp)  
法政大学環境センター  
「法政大学環境報告」担当宛て

- 発行 法政大学環境センター
- 発行日 2009年6月1日
- 制作協力 大東印刷工業株式会社  
03-3625-7481 (代)



2008年11月に法政大学  
環境改善活動推進キャラクター  
「えこぴよん」が誕生!

HOSEI × ECO



## 法政大学 環境センター

〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1

TEL. 03-3264-5681 FAX. 03-3264-5545

E-Mail. [cei@hosei.ac.jp](mailto:cei@hosei.ac.jp) URL. <http://www.hosei.ac.jp>

以下をクリックをご覧ください。 ▶法政大学の教育支援(左側バナー) ▶環境教育 ▶環境センター

おもて表紙の写真について:

多摩キャンパスを拠点に活動する環境系総合サークル  
H.E.L.P! の活動の様子です。



EMS  
JIS O 14001:2004  
ISO 14001:2004  
多摩キャンパス  
多摩キャンパス  
登録番号 JSAE140



MS  
JAB  
CM001



Trademark of American Soybean Association

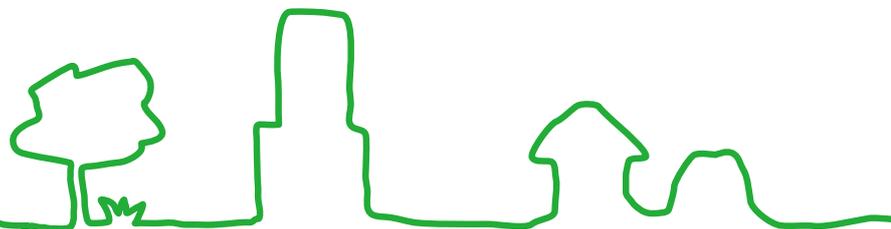


古紙配合率については、2009年6月に  
用紙供給元から証明を受けております。



みんなで止めよう温暖化

チーム・マイナス6% [www.team-6.jp](http://www.team-6.jp)



法政大学はチーム・マイナス6%に参加しています。